

生活様式としての遊動定住連続体——定住化政策後の 森林ネネツにおける社会組織と居住

A nomadic-sedentary continuum as a way of life: Social organization and residential patterns of Forest Nenets after state implemented relocation policies

高倉 浩樹 (Hiroki TAKAKURA)*

キーワード：シベリア、ネネツ、土地利用、婚姻規制

Keywords : Siberia, Nenets, land use, marriage rule

要旨

本稿の目的は、近代国家による定住政策後の狩猟採集民・牧畜民にみられる新たな生活様式を記述し、概念化することである。西シベリアの先住民・森林ネネツ人社会に焦点をあて、彼らの生活史に関わる民族誌資料を社会人類学的に分析し、半遊動的（あるいは半定住的）ともいえる生活の仕組みの解明を試みた。その結果、今日の森林ネネツにおける遊動性は、父系氏族を保有・利用の単位とするニシという宿営集団＝生産領域が現存し、同時にこの父系氏族は対となる別の氏族と相互に外婚を行う形で再生産されるべきという社会規範の機能によって維持されていることが判明した。注意しなければならないのは、彼らの生活が生活様式としての遊動ではなく、だからといって国家が設定した定住地での生活を拒絶したわけでもないことである。この状況を把握するために、本稿では、「遊動定住連続体」概念を提起した。連続体という語を用いるのは、定住と遊動を対立としてとらえず、二つの極点として考えその間に様々な居住パターンを捉えるためである。結論として、国家の統治下に入った遊動民は決して不可逆的に定住化するわけではないということ、また在来の社会組織と土地利用といったいくつかの条件がそろうことで、定住化に対して、その政策決定者が意図していたとは異なり、彼ら自身の社会組織と生業に応じた適応が新たに生じうる可能性があることがわかった。

The purpose of this paper is to describe the new ways of life in nomads (hunter-gatherers and pastoralists) after new, state implemented relocation policies were introduced and to conceptualize their characteristics. I have analyzed the ethnographic material in the life

* 東北大学東北アジア研究センター

histories of Nenets, or West Siberian indigenous people from a social anthropological perspective. I explore the mechanisms of indigenous life as being either nomadic or sedentary. The nomadism of the contemporary Forest Nenets societies has been maintained through indigenous social organizations and related social norms. These include the *nysy*, or territorial nomadic groups, consisting of the patrilineal clan. The clan is exogamous and each takes particular counter clan(s) in marriage. Such organizations have been a key to supporting nomadism, even after the relocation policy. Forest Nenets still continue a nomadic life, simultaneously, however, they do not reject the sedentary life introduced by the state. In order to understand this contradiction, I have proposed the analytical concept of a “nomadic-sedentary continuum.” Rather than seeing the inconsistency between the two residential patterns, I have emphasized several repetitions of individual choices made during the life expanse in either nomadic or sedentary forms, based on gender, life cycle, and personal events. I have tried to understand the various types of residences and ways of life through the concept of a continuum stretching between nomadism at the one end and sedentary life at the other. In conclusion, the nomads under the reign of the modern state do not involve indiscriminately themselves in the process of sedentarization. With certain conditions, such as indigenous social organizations and land use functions the nomads could invent a new adaptation that is different form the vision of policy makers that are planning the relocated sedentarization.

1. 序

現代世界において、伝統的に狩猟採集民や牧畜民と呼ばれてきた遊動民のほぼすべては、彼らの暮らす領域を国土として包摂・統治する近代国家によって定住化させられる傾向にある。その時期や対象となる集団の区切り方、暴力的なのか平和的なのかといった方法といったものは様々であるが、その意図はおおむね共通している。そもそも遊動民に対する「後進性」というステレオタイプがあり、さらに国家が領土を明確にし、また領域内にくらす人間を管理＝保護することで統治を実現する上で「障害」とみなされてきたからである。こうした中で狩猟採集民や牧畜民の遊動性は、一方的に消えていくものなのだろうか。

本稿で考察するのは、伝統的な意味での遊動性に基づく生活でもなく、だからといって国家が想定した定住化された生活のいずれでもないあり方である。具体的には西シベリアの先住民森林ネッツ人社会に焦点をあて、彼らの半遊動的（あるいは半定住的）生活の仕組みがどのような形態なのか、そしてそれがいかなるかたちで実現しているのかを民族誌的に明らかにしたいと思う。その記述・分析を通して現代世界にあって実現可能な遊動生活のあり方を理論的に提示する。

かつて北部ユーラシアの遊動的牧畜は 20 世紀の歴史のなかで消滅したと報告あるいは予測されてきた [Khazanov 1983]。とりわけシベリア・中央アジアは伝統的な意味で遊動を基盤とする牧畜民や狩猟採集民が暮らしてきた領域である。これらの地域で 20 世紀

の社会変化を促した要因の一つは、ソ連時代の社会主義化であり、その核は農業集団化と定住化そして学校教育（ロシア語教育含む）であった。集団化とは生産手段の集団化＝国营化による計画経済への包摂であるが、これによって生業はいわば近代企業的な生産体制に吸収された。また経済効率を上げるため、住民の多くは電気や病院などのインフラが整備された行政集落に定住するようになったのである。

本稿が対象とするネネツ人の場合であっても、ソ連民族学の研究において、そのトナカイ牧畜と漁労を中心とする集団化は1950年代に100%完了したと報告されている [Prokof'yeva 1964 : 567]。この種の報告はシベリア先住民史ひいてはロシア農業史のなかで頻繁に見かける言説である。その数字がいかなる社会的現実を意味しているかは、多様である。例えば、私が調査してきた東シベリアのサハ人やエヴェン人、エヴェンキ人のコミュニティにおいて集団化によって私有財産である家畜が無くなるという事態は出現せず、国家所有と私有という制度を文化が織り込む形で牧畜が営まれてきたのである。とはいえ、定住化と生産体制の国营農場化、つまり集落に生活の基盤をおきながら労働者として遊動しながら牧畜に従事するという体制が確立したという点においては、多くの地域で共通するソ連国家による一定の標準化が達成されたとみなされてきた [高倉 2000]。

こうした状況を理解するのに適切な概念モデルの一つは、「生産遊動 Production (occupational) nomadism」と「生活様式としての遊動 nomadism as a way of life」である。後者は文字通りであり説明を要しないだろう。前者は計画経済に包摂された牧畜生産の遂行のために実施される遊動牧畜ということになる。言い換えれば定住地とその周囲に広がる生産区画の分離を前提とし、住民の大半は集落が置かれた定住地で暮らす。家畜群管理者つまり労働者としての牧夫が5-6人と食事世話係という構成で宿営集団を形成し、広大な生産地のなかで放牧をおこなうというものである [Levin and Vasil'ev 1964 : 683, Vitebsky 1990 : 348]。この概念によって、旧ソ連圏地域の牧畜民とりわけ社会主義崩壊前後の時期におけるその現実を見定める定点が確保でき、様々な地域での民族誌的多様性が明らかにされてきた。実際、多くのシベリア先住民地域では、1990年代初頭の国营農場体制崩壊と経済混乱が重なったことから、部分的にはいわゆる再遊牧化という現象が生じた。しかしより詳細にみれば、この現象は生産遊動に従事していた職業牧夫達が家族をつれて遊動生活に戻るものであって、ある先住民コミュニティ全体（ないし大半）が遊動に戻ったわけではなかった。いずれにしても、この対概念をモデルとすることで、ポスト社会主義期のトナカイ狩猟牧畜民社会の民族誌記述が可能となったといっても過言ではない。

一方、西シベリアのネネツに関する近年の民族誌報告は、こうした中にあっても例外的であり、「生活様式としての遊動」概念モデルに該当することを示してきた。先に触れた

ように「100%の集団化」は達成しながらも、少なくとも1980年代末期から始まる現地調査のなかでは、ネネツ社会は国営農場体制を基盤とする生産体制ではなく、家族（個人経営）によるトナカイ牧畜と遊牧生活が営まれていることが報告されたからである〔吉田2003a, Stammmler 2005〕。この違いは、社会主義農業体制崩壊移行の先住民産業の成否に反映した。ほとんどのシベリア・トナカイ牧畜は、1990年より十数年その頭数が大幅に減少したのに対し、唯一ネネツ社会では減るところか継続的な増加を示したからである〔Yoshida 2009〕。この原因の一つは彼らが生産遊牧に移行せず、生活様式としての遊牧であったため、体制転換期に伴う社会経済の混乱の影響を受けなかったからだと考えられている〔井上1998: 12〕。

筆者が本稿で民族誌記述と分析を試みるのは、生産遊動でも生活様式としての遊動いずれでもない生活様式である。それは国家の定住化政策を前提とし、国家の統治という性質上は集落での生活基盤をもちつつも、遊動的な生活を捨て去ることなく、保持するというあり方である。対象となる森林ネネツはネネツ人の地域集団の一つであるが、ツンドラ集団とは別のエスニシティという側面をもっている。最も興味深いのは、彼らの遊動はトナカイ牧畜というより漁労に基づいて実践されているという点である。これはいわばタイガ型のトナカイ飼育と狩猟複合の一種であるが、森林のなかで河川漁労を中心とする遊動生活がどのような形で営まれているのか、そこに彼らの社会編成の原理がいかなる形で関わっているのか注目していきたい。

以下では、まず先行研究をふまえながら、森林ネネツの伝統的な社会について概観した後、統計情報を使いながら地域民族構成や遊動性について全般的状況を理解する。次いで、調査した村落と宿营地の関係について記述した上で、森林ネネツの親族組織と婚姻規制について検討する。最後に、調査地の人々の生活史をふまえながら現在いかなる遊動生活を送っているのか吟味し、考察を行う（注1）。

2. 西シベリアのなかの森林ネネツ：研究史展望

2.1. 概況

西シベリアはウラル系の先住民が多数暮らしているが、ネネツ人はその中であって約4万人（2002年度ロシア国勢調査）と隣接集団と比べると相対的には人口が多い。彼らは西シベリア北極圏からウラル山脈を越えたヨーロッパロシア北極圏に暮らしている民族集団であり、ウラル語族サモディー系の言語を話す。人類学史では、東シベリアのチュクチ人と並んで18世紀に小規模なトナカイ狩猟牧畜から、大規模な群れをもつトナカイ牧畜民化した遊動民として知られている〔Krupnik 1993〕。

ネネツ民族学研究史のなかでは、ツンドラと森林という生態的に応じた分け方や、ヨー

ロッパ・ネネツ、(西シベリア) ツンドラ・ネネツ、(西シベリア) 森林ネネツと地域的に分けた形で研究が行われてきた。特に森林ネネツは、ツンドラ方言に対する森林方言という意味での言語、ツンドラ型トナカイ牧畜に対するタイガの狩猟(漁労)牧畜複合という意味での生業面、さらにエスニシティの観点でも独自の特徴がみられることから、ツンドラ・ネネツ研究とは異なる集団という位置づけがされてきた〔佐々木 1984a, 佐々木 1984b, 吉田 2003a, Dolgikh 1970, Khomich 1995, Gemuev et al 2005, Prokof'yeva 1964, Stammer 2005, Vasil'ev 1979, Verbov 1936, 1939, Volzhanina 2009〕。

本稿が焦点をあてる森林ネネツは、オビ湾に注ぐプール川流域を中心に分布し、現在の人口はおおよそ2000人ほどだと考えられている〔吉田 2009 : 1, Zen'ko 2007 : 4〕(注2)。行政的にはロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区南部とハンティ・マンシ自治管区の北部境界地域に含まれる。自然景観は森林ツンドラや森林(タイガ)のなかに大小様々な河川が広がっている。この地域の森林は、トウヒやモミなどを主として、いわゆる暗いタイガと呼ばれる森である。亜寒帯湿潤気候に属し、その内の一つヤマル・ネネツ自治管区プール地区の行政中心地タルコサレ市では、1月の平均気温は-24度、7月の平均気温は16.5度であり、年間降水量は386.4mmである。

彼らの民族自称は「人間」を意味するネッシュヤング Neshchang であり、ツンドラ・ネネツの自称ネネツ Nenetsy とは異なっている。ツンドラ・ネネツからは、ピャン・ハサヴァ pian-khasava つまり森の人と呼ばれている〔Gemuev et al 2005 : 388, Khomich 1971 : 199, Verbov 1936 : 57〕。両者の関係は断絶しているわけではない。そもそも森林ネネツのいくつかの父系氏族はツンドラ・ネネツから分岐した集団を含むし、ツンドラ・森林双方の間で婚姻関係が結ばれていた〔Khomich 1995 : 158〕。さらに経済的にも交流があった。一般的にトナカイはツンドラで小型であり、森林で大型化するが、それゆえにツンドラ・ネネツは森林ネネツなどから大型のトナカイを入手してきたからである〔Prokof'yeva 1964 : 551〕。

2.2. 婚姻と土地利用

ネネツ社会は伝統的(19世紀末~20世紀初頭)には父系氏族 erkar を基盤として成り立っていた。氏族外婚が原則とされ、氏族の墓地や氏族毎の聖地があったほか、放牧地や狩猟区画は氏族毎に保有されていた。夏の漁労区域や家畜はそれぞれの家族(ないしその成員)毎に分配されて利用されていた〔Khomich 1995 : 156, Prokof'yeva 1964 : 560, Verbov 1939 : 63〕。重要なのは、婚姻規制にかかわって胞族ニャミ niami が存在することである。ニャミ niami とは胞族の関係にある同士が互いの関係を指すときに用いる語で、文字通りには「兄弟」を意味する。ニャミの代わりにナムザニ・ペーリャ namzani

pelia つまり「私の肉体の一部」という言い方もするという [Khomici 1995 : 171, Verbov 1939 : 49]。

ツンドラ・ネネツの場合、胞族は二つあり、すべての氏族はどちらかに帰属した。つまり婚姻の相手は、氏族を異とし、別の胞族に属する集団から選ぶ必要があった。1920-30年代に調査をおこなったベルボフは、ヤマル半島、ギダン半島、ターズ地域のネネツつまりツンドラ・ネネツの胞族が、第一群と第二群に分かれ、それぞれ 26 氏族、10 氏族から構成されていたこと報告している [Dolgikh 1970 : 104, Khomich 1995 : 170, Verbov 1939 : 46, 48]。いわばツンドラ・ネネツの氏族は、婚姻規制を軸にいわゆる双分制があったと言われている (注 3)。

森林ネネツの場合も同様に胞族があったと報告されている。1930 年代の調査では森林ネネツの父系氏族は 8 つほどあったが、主なものは (イ) アイワセダ (Naewasata) (ロ) ヴェーラ (Wela) (ハ) ジウシ (Jiwsj) (ニ) ピャク Piak の四つである。20 世紀初頭の研究では、三つの胞族があった。第一の胞族は (イ) とそれ以外はツンドラ・ネネツの複数の氏族が組となり、その内部での婚姻は不可能な集団をつくった。第二の胞族は (ロ) と (ハ) の氏族とさらに上記とは別のツンドラ・ネネツの複数の氏族によるものだった。第三の胞族は (ニ) を中心として第一・第二とも異なるツンドラ・ネネツの氏族複数で構成されるものである [Vasil'ev 1979 : 104, Verbov 1936 : 67, Verbov 1939 : 58, Zen'ko 2006 : 20] (注 4)。興味深いのは、森林ネネツは隣接して暮らす別の民族集団ハンティとも似たような婚姻規制をもっていたことである。プール川の南に流れるオビ川支流のアガン川流域のハンティは複数の氏族があつまって「ヘラジカ」・「ビーバー」・「クマ」という名をもつ集団に分かれていた。森林ネネツは、上記の四つのうち (イ) はヘラジカ集団を婚姻不可能な集団と見なし、同様に (ハ) はビーバー集団、(ニ) はクマ集団という具合だった [Verbov 1936 : 69]。これらから判断するに、森林ネネツはツンドラ・ネネツのような双分的な胞族を形成していたわけではなく、自分の身近に暮らす人々を、親族集団毎に認知し、その集団と自分たちの集団が婚姻可能か否かで二分していたことがわかる。その範囲が森林ネネツ内部だけで閉じずに、ツンドラ・ネネツまでに及ぶのは、人口が少ないことからある程度説明できるが、異民族集団も同じ形で扱っていた点が興味深い。

19 世紀末から 20 世紀初頭に於いては少なくとも森林ネネツだけでなく、ヨーロッパ・ネネツの諸氏族も双分制を作ってはいなかった。要するに双分制が確認されているのはツンドラ・ネネツ社会だけなのである。さらにいえばシベリア先住民全体のなかで社会が二つの外婚的氏族群 = 胞族からなる双分制を形成したのはツンドラ・ネネツだけだった。当時、彼らは、ヨーロッパ・ネネツや森林ネネツの氏族が、彼らの社会における第二群に属するという意識をもっていた。それ故に第二群のツンドラ・ネネツは、ヨーロッパ側や森

林のネネツとの結婚を避ける傾向があったという。しかし、これはツンドラ・ネネツのみの意識であり、森林らの方はそのような規制はなかったといわれる [佐々木 1984a : 217-218, Verbov 1939 : 47, 52-58]。

このように氏族が複合化される仕組みをもつ一方で、氏族毎に設定された領域内で複数の家族（異なる氏族も含む）が合同で遊動しながら生活するというのが基本的な生活様式であった。その社会形態はツンドラ・北極海沿岸・森林ツンドラ・森林と生態系に応じた生業によって異なっていた。例えば、ツンドラの牧畜民の場合、いずれも夏には漁労を集約的に行うため冬と比べると宿営地の規模が大きくなるという傾向があったが、森林ネネツは一つの宿営地は恒常的に1~2の少数の家族で構成されていたという [Gemuev 2005 : 412-415]。

宿営集団が使う領域は父系氏族毎に保有されてきたが、その宿営集団およびそれらが利用する領域をンゲシ (ngesy, ngysy) と呼ぶ。宿営集団は所有する氏族があったものの、常に固定した成員によって構成・利用されるのではなく、季節的生業活動でその数は増減した。例えば、ツンドラ・ネネツの場合、夏の初めまでは2-3の家族で宿営集団を構成したが、7-8月になると漁業やトナカイ放牧の都合で3から12家族ぐらゐが集まる大きなキャンプを作り、秋になると再び分散するというものだった。森林ネネツの場合は先に述べたように基本的に少数の家族で宿営集団が構成されたが、春から秋にかけての漁労時期には親族の原理に特にこだわらず合同宿営地を形成していたという [Gemuev 2005 : 412, Khomich 1995 : 157, Zen'ko 2007 : 133] (注5)。

宿営地は天幕 (mia) が家屋として用いられた。天幕は円錐形型で、柱となる木を30-50ほど用意し、そのまわりをトナカイの皮 (毛皮) で覆うものだった。この天幕はネネツ社会の最少の単位である。家族に該当するミャドチェル (miad'ter, miatchel) (注6) であるが、この語の意味は「私の天幕に暮らす人々」である (注7)。1920-30年代の統計資料の分析によると、当時、ツンドラ・ネネツの場合、核家族と拡大家族の割合は53% : 39%であり、森林ネネツの場合もほぼ同様であった [Volzhanina 2009 : 123-124]。

3. 民族構成と生産体制

3.1. 管区における民族別人口

森林ネネツの人口や遊動に関わる全般的状況を、筆者の現地調査で得たヤマル・ネネツ自治管区の統計データを使って概観してみよう。

同自治管区のなかでのネネツ人全体の人口は26465人であり、これは地区全体の人口の5.2%に過ぎない。ネネツ以外の北方先住少数民族 (注8) は概してさらに少数である。例えばハンティは8760人 (1.7%)、セリクープは1797人 (0.4%) に過ぎない。ちなみ

に最大の人口はロシア人で 298359 人 (58.8%) である (ロシア国勢調査 2002)。

ロシアの人口統計は、都市部と農村部に分けて集計されている。ネネツのほとんどは農村部に暮らしている。現地でも入手した統計によれば、農村部におけるネネツ人は 25398 人であり、農村部全体のなかでは 30.8% をしめる。ネネツも含まれるロシアにおける「北方先住少数民族」の割合は、自治管区内農村部においては 42.9% となる。つまり都市部ではこうした先住民はほとんどみられないが、農村部では半分近くの割合をしめるということになる。農村部におけるロシア人は 34.9% であり、それ以外にはタタール人やウクライナ人がいる。

都市部と農村部のうち農村部は多くの地区で先住民人口が過半数を占めるが、ガス田・油田開発地域では非先住民が大半をしめるなど、多様な民族人口構造が内部で広がっている。自治管区を構成する地区毎にみると農村部における北方先住少数民族の割合は、例えばナディム地区が 22.2%、ヤマル地区は 67.9%、最大はターズ地区で 72.3% と幅がある。農村部であっても先住民とロシア人だけで構成されるのではなく、様々な非先住民系の民族が暮らしているのである。ただし実際の村というレベルでみるとさらに多様である。実際に、私が調査したプール地区は地区平均でみると北方先住少数民族は 14.5% と少なく、圧倒的に非先住民が多いことになる。しかしハラムプール村の場合、北方先住民割合は 92.6% と圧倒的多数である。つまり先住民が多数派をしめるかどうかはそれぞれの村レベルで異なっているのである (注 9)。

3.2. 遊牧世帯

ロシア (ソ連) の統計で興味深いのは、遊動世帯統計である。これは先住民政策や社会福祉の観点から集計されている。この統計が実態をどのくらい反映しているかは別に検討が必要だが、統計データからある程度の概況を理解することはできる。統計資料上、2007 年のヤマル・ネネツ自治管区において北方先住少数民族は 39.1% が遊動人口として登録されている。個別の地区毎に調べると過半数を超える人口が遊動人口として登録される場合から、僅か 1.6% とほぼ遊動人口がないシュルシャカル地区まで地域的多様性が高い。ネネツ民族学研究においてトナカイ牧畜による遊動生活者が多数いることで知られているのは、ヤマル地区とターズ地区だが、統計的にはそれぞれ 49.1%、70.4% である。上記三つの地区を除く 4 つの地区では、おおむね 20% 台程度である。北方先住少数民族でもあっても過半数以上は、定住者として登録されている (注 10)。

表 1 を見て欲しい。これはプール地区で登録されている先住民生産組合 (obshchina) および農牧企業のリストで、名前・設立年・事務所・生産部門と労働者の数などが記してある。複数のデータを集計して作成したので完全にデータがそろっているわけではないが

表1 プール地区における先住民企業体一覧

#	type	name	office	year of organization	type of production	workers	number of reindeer	result of 2007
1	Obshchina	Piak-Purovskaia	Khanymei	1993	reindeer husbandry, hunting, fishing, collecting berry	60	—	meat 4 t, fish 104.4 t, fur 569 piece, berry 36 t
2	Obshchina	Sugmutsko-Piakytinskaia	Muravlenko town	1993	reindeer husbandry, hunting, fishing	92	—	meat 4 t, fish 57 t, fur 500 piece, berry 7.1 t
3	Obshchina	Ety-lalia	Khariasavei	1998	reindeer husbandry, fishing, collecting berry	184	—	fish 100 t, fur 390 piece, berry 24.1 t
4	Obshchina	Kharamupuskaia	Tarkosale town	1998	reindeer husbandry, hunting, fishing, collecting berry	87	—	meat 5 t, fish 104.4 t, fur 78 piece, berry 3.7 t
5	Obshchina	TSO Icha	Tarkosale town	1998	reindeer husbandry, hunting, fishing	94	—	fish 116.6 t, berry 0.05 t
6	Obshchina	Chasel'ka	Tarkosale town	2006	reindeer husbandry, hunting, fishing, collecting berry, folk handicrafts	13	—	
	Obshchina	ttl				530		meat 13 t, fish 482.4 t, fur 1537 piece, berry 70.95 t
7	Firm	Verkhnepurovskii (former state farm)	Tarkosale town	1961	reindeer husbandry, fishing, hunting, fur animal husbandry, pig breeding, folk handicrafts	ttl 141 + α (reindeer-36 [app], hunter & fisherman-53, fur breeding-18, fur processor-28, pig breeder-6)	6176	—
8	Firm	Purovskii (former state farm)	—	—	—	—	9920	—

出典：Bank dannykh obshchin korennykh malochislennykh narodov Severa lamalo-Nenetskogo avtonomnogo okruga na 01.01.08g.; Uchet pogolov'ia po vsem kategoriám khoziaistv na 01.01.2008goda po lamalo-Nenetskomu okrugu; Author's field date

それでもこの地域のトナカイ牧畜や漁業などの第一次生産業の状況の概観を把握することができる。なお組織のタイプで企業型とは元々国営農場だったものである。これに対し先住民生産組合とはソ連崩壊後、先住民の生業生産のために設けられた法人の一種である。

2008年現在で企業型組織は2つ、先住民生産組合は6つある。これを見ると二つの組織型で生産構造の違いが読み取れる。企業型は雇用（契約）労働者数も多く、生産部門も多岐にわたっているが、トナカイ飼育が一つの中核になっていることである。ベルフネ・プール企業では6つの飼育班があり、平均すると一つの飼育班で1100頭のトナカイが飼育されている。それぞれの飼育班毎に所属（所有）を示す耳印が刻まれ、さらに牧夫達の私有のトナカイが混じりながら管理されている。実態を見ていないので断言はできないが、このような生産形態は国営農場時代とそれほど変わっていないと判断できる。これに対し、表の2007年成果をみればわかるように、先住民生産組合全体ではトナカイ肉生産よりも漁業が中心である。トナカイ頭数は不明なので判断できないが、肉生産量から判断するに、メインがトナカイ牧畜であるとは考えられない。つまり、先住民生産組合は小規模なトナカイ牧畜を行いながらも、主たる生産は漁業におかれている。

プール地区においては、大規模な雇用者数を持ち、様々な生産部門をもつ事業体に属し

ながら生産活動を行うといういわば旧国营農場での生産体制に従事する人も少数であるが存在する。彼らの生活がどのようなものであるか実態は不明であるが、聞き取りを行ったベルフネ・プール企業体の場合、トナカイ飼育は一つの飼育班毎に4-5人の牧夫と天幕食事係で構成される宿営集団で営まれている。このあり方はいわゆる生産遊動に該当するものである。その一方、地区内にある6つの組合をそれぞれ拠点として宿営地で漁業を中心とする生業を営む生活が展開していることである。興味深いのは、それぞれの先住民生産組合は番号⑥を除くと、その成員は60-184人と比較的大規模な組織であることである。実際に先住民生産組合で働いている人の数は530人に及ぶ。プール地区での北方先住少数民族の人口が約三千人であり、これは子どもや老人などを含む数であることを考慮すると、かなり多くの人々が先住民生産組合で職を得ていることになる。こうした条件の中で彼らは、どのような生活を送っているのか、次章で検討してみよう。

4. 社会空間

4.1. 村の構造

森林ネネツ社会は、数百人規模の行政村落が存在し、その周囲に遊動生活者達が暮らす宿営地が点在するという構造になっている。この関係をより詳細に見ていこう。

調査対象地は自治管区内プール地区ハラムプール Kharampur 村である。自治管区の首都サレハルド市から東に約580 km、プール地区の中心地タルコサレからは南に70 kmほどの距離に集落があり、その周囲には大小様々な河川や湖沼を含む森林地帯がひろがっている。2008年1月1日現在、ハラムプール村の登録人口は501人である。このうち464人が北方先住少数民族で25人がロシア人、12人がその他であった。北方先住少数民族の内訳は、82%がネネツで18%がセリクープ人である。この北方先住少数民族人口のうち遊牧世帯は356人=76.7%と極めて高比率である。彼らは集落の周囲の森林で遊動生活を送っているわけである。北方先住少数民族の非遊牧世帯人口は108人であり、ロシア人25人やその他の民族12人を加えると145人が集落に暮らしていることになる(注11)。

ハラムプール村の名前はネネツ語でカラマツを示すハルヴ kharv と川を示すプール pur からなる。集落創設の歴史は、この地域では比較的良くあるように、1935年交易所(ファクトリー)が開設されたことに始まる。2年後スターリン集団農場が作られ、第二次世界大戦後は国营農場に統合される。1964年には学校そして72年には医療クリニックと図書室が開設され集落としての体裁を整えた。この集落の建物はすべて極めて新しく人工的である(写真1)。というのもこの村の領域内では石油・ガス田が多数あり、そのための開発の補助金が石油・ガス会社から出されたからである。これら村の家屋や学校などは2001年から建設が始まった(注12)。

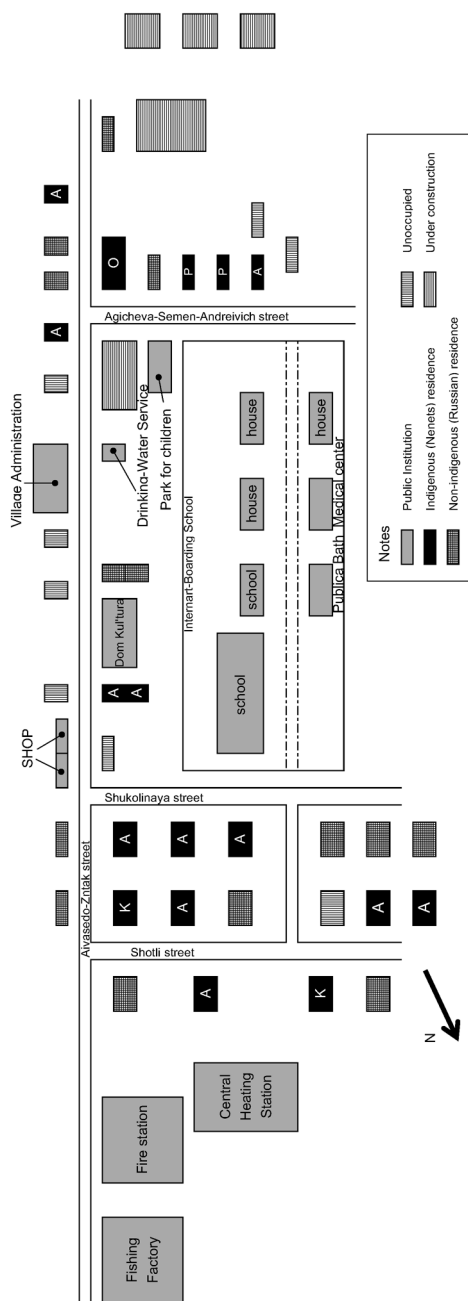


図1 ハラムプール村落 (2008年3月16日作成)

実際に、ハラムプール集落の建造物配置は、筆者が制作した図1を見て欲しい。中央部に役場・文化の家・寄宿舎学校・食糧雑貨店・集合住宅などの公共施設をおき、そのまわりに民家が並ぶというかたちで整然と構成されている。民家の個数は39軒、学校教師のための集合住宅（建設中）1戸、さらにいくつかの建設中の家屋が数軒という具合である。中央部で大半を占める学校施設は寄宿舎を含み数多くの生徒と教師（11人）が暮らしている。民家39軒のうち非先住民（ロシア人）が暮らしている戸数は14、ネネツ人の家屋は17軒、現在空き家となっているのは8軒であった。一つの家屋に何人暮らすかによって異なるが、39件の戸数は、統計上の定住人口約150人という数字と大きく矛盾しない。

現在、集落に定住しているといえるのは、非先住民・先住民ともに仕事の都合上ハラムプール集落で仕事をもっている人々である。そのような職業は、文化の家の職員（現在、11人）、役場（11人）、学校教師・職員（11人）、消防局（15人）、ボイラー局（7人）、住宅公共サービス局（ZhKKh）（7人）である。図1の地図において、先住民の家屋には戸主の姓のイニシャルを書いてある。それをみると、アイワセダ（A）12軒、コジムキン（K）2軒、ピャク（P）2軒、その他（O）1軒と、圧倒的にアイワセダが多いことがわかる。

宿営地で暮らす人々が現金を得る手段は、この集落に拠点を置くハラムプール先

住民生産組合を通してである。村から少々離れたハラムプール川沿いに、冷凍倉庫やゲストハウスなどをもつ生産組合の施設カルナットがある。ここはハラムプール村の起源となった交易所が置かれた場所であり、道路だけでなく、川に舟が設置され、直接上がってこられるようになっている。ソ連崩壊後、プール地区を管轄していたベルフネ・プール国营農場は、その支部があった村によって存続・離脱さまざまな手続きが取られたが、ハラムプール村は離脱を選択し、1998年に先住民生産組合が設立された。この組合が取り組むのは、トナカイ飼育・狩猟・漁業・野生有用植物採集であり、87人のメンバーが登録されている。生産高をみるとトナカイ肉5トン、魚104.4トン、毛皮78皮、有用植物3.7トンと漁業が最も大きい生産部門となっている（表1参考）。生産組合のメンバーといっても定額の給与があるわけではなく、生産物の納入量によって収入が変わる請負である。

4.2. 天幕

天幕 (me) は円錐系である (写真2)。計測した一つの天幕の内部の直径は5.7m、高さ3.8mだった。ここに夫婦一組とその幼い子ども二人、独身20代の夫の弟一人と、彼ら兄弟の母、さらに親戚の十代の大学生の男の子が暮らしていた。成人が5人と子ども二人さらに調査にきていた我々二人が泊まったがそれでも十分な広さがあった。調査中に天幕とともに暮す家族 (miattek) の居住者数がわかったのは、全部で9例である (表2)。平均をとると一天幕あたり5人が暮らしていることになる。9例のうち3例は拡大家族で暮らしていたがそれ以外は核家族であった。

天幕内部について説明しよう。柱 (ngu) は丸木を三本にして先端部分で結び、下の部

分を開く形で基本を作っている。その長さは4mほどある。この柱の先端部分に丸木35本を立てかけるようにして外壁部分の柱が組まれ、そのまわりにはキャンパス地の布が撒かれている。裏地はフェルト製だった。床は板が敷き詰められている。入り口から最も奥の空間は聖なる場所で、そこを横切ってはいけないと考えられている [Stammler 2005 : 85-86]。とはいえ写真3にみられるように奥の場所にはテレビとDVDプレーヤーが設置されており、宗教的な肖像画

表2 宿営地における天幕ごとの居住人数

#	Tent Population	family type	Camp site
1	8	E	Nybyiakha
2	3	N	Nybyiakha
3	5	N	Khodutei
4	4	N	Khodutei
5	7	N	Chubashika
6	5	E	Nybyiakha
7	4	E	Kharampur
8	2	N	Chubashika
9	7	N	Chubashika
TTL	45		
avr	5		

注：E: extended family, N: nuclear family

や人形などが見えなかった。調査時、宿営地においても携帯電話の受信が可能であり、何人かの牧夫は天幕内で携帯通話をしていた。天幕の真ん中には煙突のついた薪ストーブが設置され、その近くにはヤカン、鉄ナベ、ホーロー製のコップや深皿、さらにパン形もあった。天幕は入り口を背にして薪ストーブを中心にして右と左の空間に分かれている。チュムの内部には薪ストーブを挟んで低い座卓 pisan が二台おかれていた。大きさは縦 58 cm 横 89 cm 高さ 13.5 cm とかなり足が低い。

天幕の入り口はいずれも南東方向に向けて設置されている。入り口からはいって右手が天幕の持ち主である夫婦の寝る場所で、子どももそこに寝る。彼らはそこに座卓を出し食事をする。これに対し、左手の空間は独身の弟とその母などがつかっている。日中、客が来るときに通されるのもこの左の空間だった。

天幕内外の温度差のため、霜が天井付近につくが、これを落とすのは女性（妻）の仕事であった。このことをはじめとして天幕内部の作業つまり内部の掃除や食事作りは女性によって行われている。朝起きるとまずストーブに火を入れるのも女性であり、また洗濯もそうだった。写真4にあるように、洗濯物は天幕内部に干されて乾燥される。冬の間の日中、女性達は外にでることはあまりなく、天幕内部で毛皮衣類を製作しながら時間を過ごしている。また同じ宿営地内の別の天幕の女性を訪問し、時間を過ごすことも見られる。これに対し、男性は天幕の外が仕事の空間である。宿営地にはしばしば隣接する宿営地の牧夫が訪問してくる。この時にお茶や食事を用意してもてなす役割は女性が果たす。そうした際に、飲食をともにすることはない。客が来ていると女性は専ら給仕役に徹している。また子どもも大人とは別に食事を取る。しかし朝食や夕食などで天幕構成員のみの場合、男女・子どもが共に食事をする。その場合であっても基本は夫婦とその子どもは一つの座卓を囲み、独身の弟と母は別の座卓を使っていた。

天幕周囲の空間的配置について述べていこう。天幕の周りには吹きだまりができていてちょうど雪の土塁のようになっていた。土塁の幅が 2 m、土塁とチュムの間が 2 m だった。天幕の近くには薪割り場が設置され、さらに少し離れた場所にスノーモービル置き場が設置されていた。スノーモービル置き場は橇 kan もおいてある。宿泊した家族は六機の橇（一台は破損）とスノーモービル専用の鉄製橇をもっていた。調査した期間中、移動手段はほとんどスノーモービルに頼っているが、必ずその後ろには木製・鉄製いずれにしても橇を付けて生業活動を行っている。さらに天幕の後ろ側には発電機が置かれていた。

このような設備を一つの単位として、横に一行になるように天幕が三つ並んでいるのが宿営地の特徴である。図2を見て欲しい。これは宿営地ニビヤハの実測図である。これを見ればわかるように、天幕と天幕の間は 20~50 メートルほどの距離がある。また 3 m × 3 m ほど小さな囲い vatiting があり、これは毛皮の干し場ないし、袋に入れた魚を保管

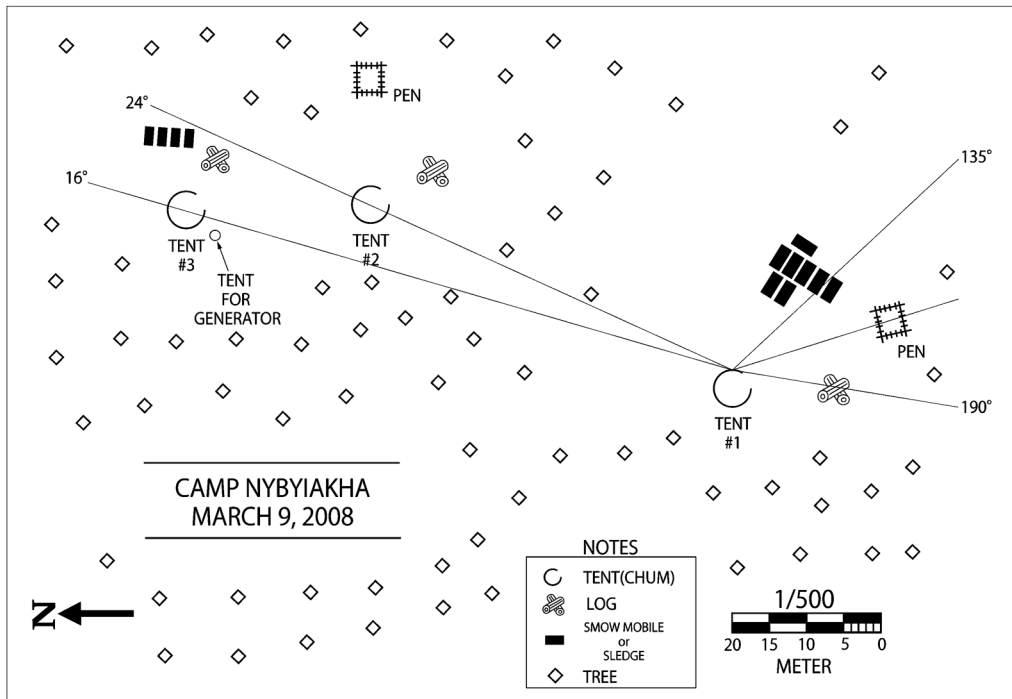


図2 宿营地ニビヤハ実測図

する場所となっている。宿营地における天幕の配列は概ね直線に並んでいる（注13）。

5. 宿営集団と親族

5.1. 宿営集団＝生産領域ニシ

これまで集落と宿营地のあり方を見てきた。宿营地は森林ツンドラのなかに数戸の天幕が並ぶことで形成されているが、人々はここから周囲に出かけていきトナカイ牧畜や漁労・狩猟に従事する（写真5&6）。ここでは、宿营地をふくむ生業空間について述べたいと思う。

人々はハラムプール集落の周囲に広がる森林を「ツンドラ」と呼ぶ。マクロな生態学的分類では森林にふくまれるが、確かにマイクロ生態としてみると疎林と川筋、そして小さな平原が繰り返えし広がる空間である。図3を見て欲しい。これはハラムプール集落を北におき、その南に広がる「ツンドラ」とそこで設営された宿营地の場所を地図化したものである。これをみると大小さまざまな河川のなかに彼らの生活空間が広がっているのがわかる。宿营地は、主として川筋を中心に設置されていることがわかる。ここでは集落と宿营地が示されているが、一番村に近い宿营地は40キロほど、遠いものは70キロと離れ



写真1 ハラムプール村集落 (2008/3/15)



写真2 森林ネネツの冬の宿营地 (2008/3/8)

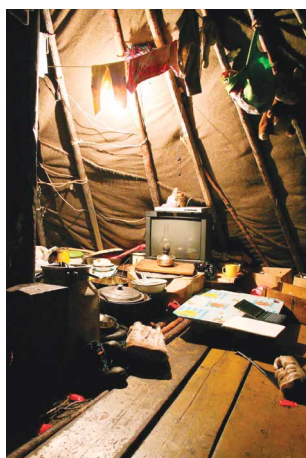


写真3 天幕内部、奥にあるのはDVD専用のテレビ (2008/3/9)



写真4 天幕内の生活 (2008/3/12)



写真5 氷下刺網漁に従事する森林ネネツの男性 (2008/3/9)



写真6 家畜トナカイに魚を給餌する (2008/3/11)

ている。

宿営地は、調査地ではニシ nysi と呼ばれている。ニシは、天幕を設置することが可能な領域であり、同時に放牧をともし、漁や猟区画を共有している宿営集団ともいえる。いわば、先行研究紹介のなかで言及したンゲシ (ngesy, ngysy) と原理的には同じである。ハラムプール・ネッツの人々にとってこうしたニシは何よりも漁業の場所であった。少なくともニビヤハ宿営集団の人々のトナカイ飼育は小規模で、飼育頭数は約 50 頭程であった。

宿営地という言葉で説明すると、点というニュアンスがでてしまうが、ニシはあくまで生業を行うための面的な領域であり、かつその領域を利用し移動生活を共にする宿営集団を意味する概念である。例えば、私が滞在したニシはニビヤハ (Nybyiakha) と呼ばれる。ニビヤハの人々は、この時いわゆる冬営地に滞在していた。だからといって毎年同じ場所に天幕を立てるわけではない。定められた領域のなかで年に応じて場所をかえて設営されるのである。したがって周囲には、過去において冬営地が設置された場所の跡が残っている。これをミャチ miaty と呼ぶ。一方、夏営地はやや恒常的な性質をもっている。ニビヤハの場合、夏営地は冬営地からスノーモービルで 30 分ぐらい、距離にして 10 キロであった。そこには天幕の骨組み 6 張分と、木造建造物である物置小屋が 4 戸、さらに簡易トイレもあった。一般的には夏営地の人口は冬営地よりも多く、活気があるという。当然であるが、冬営地・夏営地ともにニビヤハと呼ばれる。

ちなみに、森林ネッツの人々にとって冬 khul" a は 11-2 月であり、春 nal" a は 3-5 月、夏 tangnchu は 6-8 月を意味し、秋 kyngsumai ai gi は 9-10 月であると考えている。冬営地は一年を通して最も長く使う場所で、10 月終わりから 5 月末までの 7 ヶ月近く滞在する。5 月になると、家畜トナカイ群をつれツンドラに移動し、そこでトナカイを放つ。人の方は、6 月初旬には夏営地に移動し、漁労中心の生活を送るという。10 月始めには夏営地から移動するが、その時にすぐに冬営地に移動せず、秋営地に移動することもある。年によって利用期間が異なるが、10-11 月半までの間が秋営地の主な利用期間である。

ニシが生産領域であると同時に、特定の親族集団の所有の単位であることは先行研究紹介のなかで触れた。ニビヤハは、ピャク氏族とアイワセダ氏族によって宿営集団が構成されていた。聞き取りによってわかったのは、ニシはそれぞれ固有名をもち、かつそれを利用するメンバーがきまっていることである。表 3 を見て欲しい。これは「ハラムプール・ツンドラ」と呼ばれる領域つまりハラムプール村管轄内のニシの一覧である。ニシの名前と、その利用氏族名、さらに現在それぞれのニシでは天幕が何張設置されているのかを記した。残念ながら、これら 17 のニシの宿営地がどこで設置されているのか全てを地図化

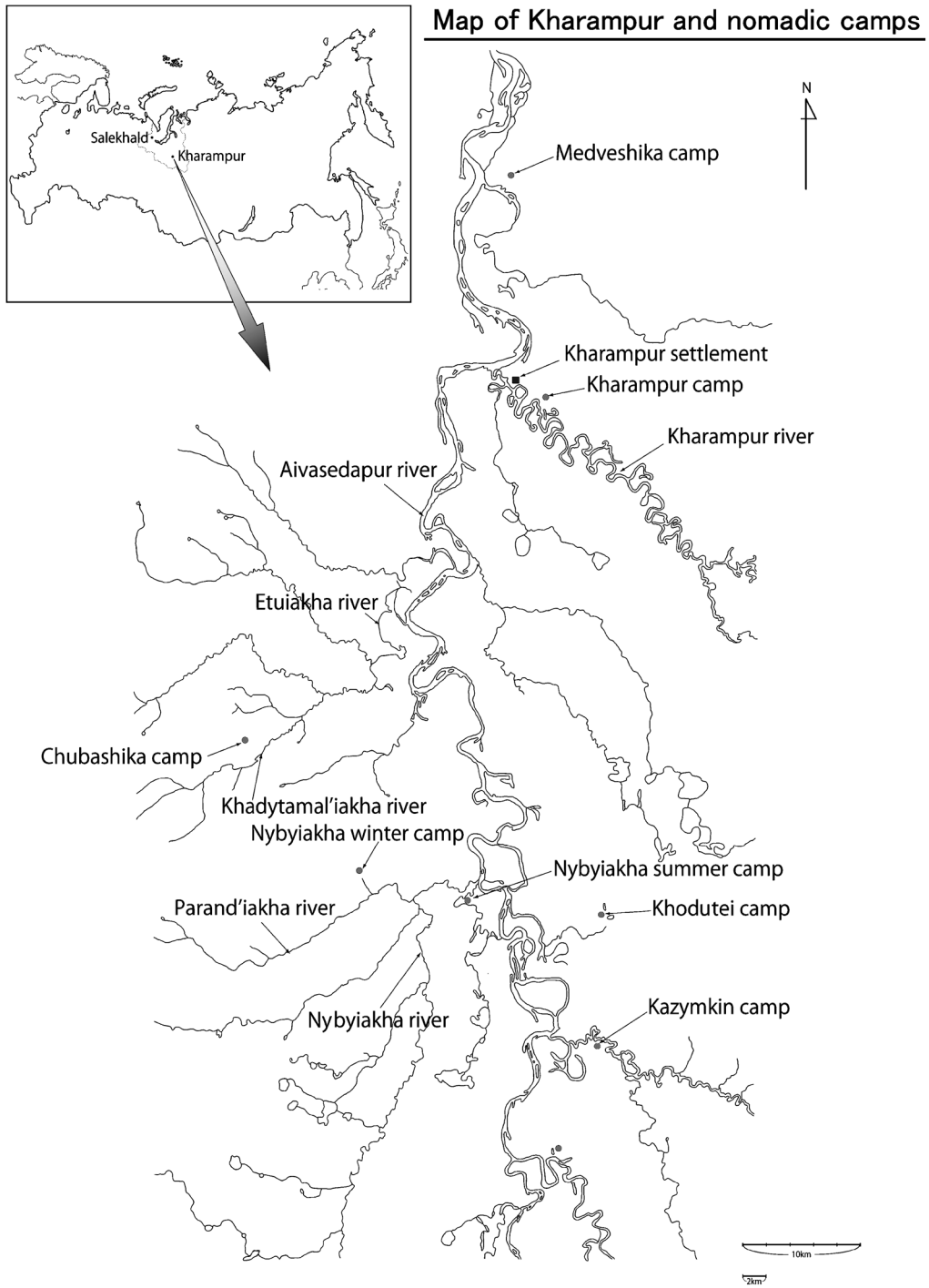


図3 ハラムプール村と宿营地

表3 ハラムプール村内のニシ（宿营地）一覧

#	Nysi-Camp unit/ territory	Owner	number of Chum
1	Aivasedopur	Aivasedo	5
2	Apynd'iakha	Agichev	1
3	Verkhne- Chasel'ka	Piak, Agichev	16
4	Vointo	Aivasedo, Vello, Piak	8
5	Medveshka	Aivasedo	15
6	Nybyiakha	Piak, Aivasedo	3
7	Ozero Chasel'ka	Agichev	2
8	Paishi	Aivasedo, Piak	3
9	Piakopur	Piak	5
10	Taishi	Aivasedo	3
11	Kharampur	Aivasedo	1
12	Khariato	Nenian'gu	—
13	Khodutei	Agichev, Kozymkin	4
14	Chasel'ka	Agichev	—
15	Chastlitsa	Piak	1
16	Chubashika	Piak	6
17	Yn'apur	Piak	20
TTL			93

することはできなかった。図3のなかで示されているのはその一部である。

これを見ると、ハラムプール村内には17の宿営集団があり、天幕は93張り（不明な2集団を除く）あることがわかる。先ほど調査のなかで算出した天幕の平均居住数が5人であることを述べたが、単純に換算すれば、465人ほどが森林ツンドラ内で暮らしていることになる。また一つのニシには最も少ない場合で1張、多い場合で20張と多様であるが、平均をだせば6.2張（93/15）であり、これも先ほどの平均居住人数を勘案すると、一つのニシに暮らすのは平均31人と算出することができる。こうした数字はあくまで平均値でしかなく、また夏营地と冬营地の利用形態も勘案して

いないが、ニシの宿営集団としての性質を理解するためにある程度の目安となるだろう（注14）。

ニシはそれぞれ固有名をもっているが、その多くは河川名と一致している。しかしそれ以外に湖名（#7）が付けられる場合、ロシア語のクマをもじった名前（#5）などがあり、どのような原理で名付けられているのかはわからなかった。

興味深いのは、利用者に掲載した氏族名である。元々ニシはその領域の所有が氏族毎に決まっている。利用者欄に一つの氏族名しかない場合、それは利用者と所有者が一致していることを示している。複数ある場合、筆頭の氏族が所有者であるが、現在共に宿営集団を暮らしている人々の氏族名が載っている。

ハラムプール・ツンドラでは17のニシの所有構成は、ピャクは8つ、アイワセダが6つ、アギチェフは4つ、ニヤング Neian'gu が1つとなっている。ただし複数の氏族が共同で利用している場合もある。例えば、ニビヤハ（#6）は3張の天幕があり、元来はピャク氏族のものである。ところが現在暮らしているアイワセダ氏族の二家族が元々暮らしていたニシであるハラムプール宿营地（#11）内で、石油開発が始まり十分生業する空間が足りなくなり、1994年に、ニビヤハに移動したという。このような移動の際には、役場が仲介することはなく、それぞれの家族同士で話し合っ解決した。またメドゥベーシ

カ (#5) は、アイワセダが現在つかっているが、1997年まではハラムプール村の旧国营農場型生産企業が行っていたトナカイ飼育の飼育班が利用する領域であった。いわば牧夫として雇用された人々がこのニシをつかっていたのである。

こうしてみると、空間としてのニシは、氏族を所有原理としながらも、地域でともに暮らす人々の事情にあわせて宿営集団としてのニシが柔軟に構成されているとまとめることができよう。興味深いのは、このようなニシの利用にあたって、行政は関知せず、自分たちできめてきたという発言が何人もの人々から得られたことである。ソ連時代の国营農場による土地利用とハラムプール・ネネツの人々のニシ利用がどのような関係にあったのか、詳細は不明であるが、すくなくともソ連国家に完全に統御された土地利用ではなかったのだと考えることができるだろう。

5.2. 婚姻規制

ニシの所有そして利用の単位として氏族が重要な社会的分節となっていることを見てきた。現代森林ネネツ社会において氏族が機能するのは、生業における領域だけではない。婚姻規制をめぐる人々の認識や行為において、氏族は重要な指標として機能しているのである (注15)。

先の研究史で言及したように、伝統的なネネツ社会は父系氏族を基盤として胞族を形成し、異なる氏族・胞族と結婚するものとされてきた。今回の調査のなかで生活史を聞き取る中で、氏族外婚が極めて明確に人々に認識されていることに気がつき、結果として、現在も氏族外婚が実践されていることを確認した。とはいえ、多くの例外も存在している。氏族外婚はいわば社会規範として人々に認識されているといえる。一方、研究史のなかで見られた結婚してはいけない氏族を複数まとめて範疇化するという「胞族」の存在を確認することはできなかった。

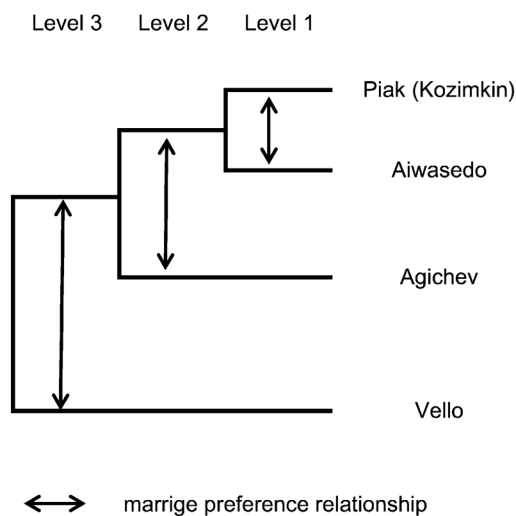
現在の森林ネネツにとって婚姻規制として認識されている社会規範は、(1)氏族 (同姓) 結婚をしてはならず、また(2)結婚にはどの氏族と婚姻するのが好ましいかについての決まりがある、という二点である。アイワセダとピャクに属する複数のインフォーマントから確認した範囲では、(a)アイワセダ Aiwasedo とピャク Piak とは婚姻するのが好ましい。(b)アギチェフ Agichev (セリクープ) はピャクやアイワセダと、(c)コジムキン Kozimkin は元々ピャクと同じなので、ピャクとみなす。(d)ヴェッロ Vello はアイワセダ/ピャク/コジムキン/アギチェフと可能ということだった。つまり、研究史の中では結婚に不適な氏族が群として範疇化されていたのに対し、現在は結婚すべき氏族が明示されるというように規則は反転しているのである。

ここに提示した氏族の内、アイワセダ、ピャク (=コジムキン)、ヴェッロは、1930年

代の調査で森林ネネツの主な氏族と指摘された4つの氏族の内の三つと重なっている。アギチェフはセリクープ人であり異民族集団だが、これも1930年代の調査では森林ネネツと近接ハンティの氏族の間では婚姻規制が存在したことを考えると、ハラムプールのネネツがアギチェフを婚姻規制の対象にいれていてもおかしくはない。なおアギチェフの人々もネネツ語を日常的に使用している。今回の聞き取りのなかで、祖先を共有とされるピャクとコジムキン以外に、共に共通の婚姻規制をもつ氏族は存在しなかった。1930年代の調査においても、森林ネネツと胞族を形成したのは、ツンドラ・ネネツの氏族であったが、今回の調査のなかではそのような存在が意識されているとは確認できなかった。その意味で少なくとも今回の調査においては、森林ネネツの間で現存する形で胞族はいないと指摘することが可能である。

図4はこの四つの氏族の外婚関係を図化したものである。これをみると、レベル1ではピャクとアイワセダ、レベル2ではピャク=アイワセダとアギチェフ、レベル3ではピャク=アイワセダ=アギチェフとヴェッコがそれぞれ婚姻すべき対象となっていることが読み取れる。いわば外婚氏族関係が階層的に分節化している特徴をもっている。少なくとも現在のハラムプール村周辺の森林ネネツの氏族関係は、婚姻すべきとされる二つの氏族関係が存在し、それが入れ子的に拡大する形で広がっているということができよう。

興味深かったのは、アイワセダとピャク両氏族にはネネツ語でニングリニネシュング(ningl^lnineshng)と呼ばれる下位区分があることだ。アイワセダは(1)アイワセダ(2)ジャンヒュータ [D'iankhiuta] (3)ジェタト [Detat] (4)ノイサマ [Noisama] (5)ンガハネ



イ [Ngakhanei]の五つである。一方ピャクは(1)ピャク Piak(2)パンヒ [Pankhi] (3)ニュトゥンタ [Ngytynta] (4)ンガイヴァヒ [Ngaivakhi] (5)セパ [Sepa]である。これらの下位区分でそれぞれアイワセダ・ピャクがくり返されるのは、「純粋な」アイワセダ・ピャクを意味するという説明だった。あるインフォーマントは、同じ氏族名でもその下位区分が異なっていれば婚姻可能だという見解を述べたが、複数のインフォーマントはそのような規則はないと否定した。

先行研究でも森林ネネツの氏族に下位区分があることは指摘されている。これ

←→ marriage preference relationship

図4 ハラムプールにおける結婚と氏族関係

らの下位区分は1930年代の調査そして2000年代に行われた調査とほぼ一致している。興味深いのは、こうした下位区分の分類は森林ネネツ内部でも一致しておらず、どの地域に暮らしているかで、下位区分の数も含めて異なっているという指摘である（Zen'ko 2007: 19, 32）。この下位区分がいかなる機能を持っていたのか先行研究では十分明らかになっていないが、筆者の調査でも同様だった（注16）。

婚姻規制に関わる社会規範をふまえた上で、その実態について分析をすすめよう。後述するが、筆者はハラムプール村およびニビヤハをはじめとする宿営地において生活史データを収集したが、その際に、家族関係（親族及び姻戚関係も含む）についてもより具体的な情報を収集するように努めた。結局、宿営地で暮らす10人、村で暮らす8人から家族関係についての詳細を聞き取り、個人名・年齢・性および氏族名等を含む結婚に関わる（重複しない）情報は33サンプルとなった。結果として、配偶者の情報が不明なサンプル10は有効データに含めずに、23のデータを分析した。その結果が表4である。

有効データの23サンプルは、結果としてアイワセダとピャクそれぞれの関係者から得られたものだけとなったが、極めて驚くべき傾向が出現した。アイワセダ出身者の60%（9/15）は配偶者にピャクを選び、ピャク出身者の場合100%（8/8）がアイワセダ出身

者を選んでいたのである。サンプル数が少ないので、このことから過度な一般化はできないが、二つの氏族間で結婚すべきという規範は社会のルールとして現実的に機能しているといえよう。特に年齢を見ればわかるように婚姻規制を守っているのが、高齢者など一定の年齢層に偏ることなく、50才代から20才代ま

表4 ハラムプール村における婚姻関係

ID	clan	sex	age	clan	sex	notes
1	Aivasedo	M	the deceased	— Piak	F	from Sanburg
2	Aivasedo	M	1955	— Piak	F	
3	Aivasedo	M	1958	— Piak	F	
4	Aivasedo	M	1967	— Piak	F	
5	Aivasedo	M	1973	— Piak	F	
6	Aivasedo	M	1974	— Irishikova	F	
7	Aivasedo	M	1977	— Kozimkin	F	
8	Aivasedo	F	1964	— Aivasedo	M	
9	Aivasedo	F	1971	— Piak	M	to Samburg
10	Aivasedo	F	1975	— Piak	M	
11	Aivasedo	F	1977	— Tatar	M	
12	Aivasedo	F	1978	— Piak	M	to Khanimei
13	Aivasedo	F	1979	— Tatar	M	
14	Aivasedo	F	1983	— Piak	M	to Khanimei
15	Aivasedo	F	1999	— Russian	M	
16	Piak	M	1936	— Vello	F	
17	Piak	M	1962	— Aivasedo	F	
18	Piak	M	1968	— Aivasedo	F	
19	Piak	M	1972	— Aivasedo	F	
20	Piak	F	1955	— Aivasedo	M	
21	Piak	F	unknown (50s)	— Aivasedo	M	
22	Piak	F	unknown (young)	— Aivasedo	M	to Khanimei
23	Piak	F	unknown (young)	— Aivasedo	M	

で幅広く見られることも重要である。このことから婚姻規制は世代に関わりなく、ハラムプール村及びその森林ツンドラの宿営地で暮らす人々の間で一定の拘束力ある規範として維持されていると指摘できる。

アイワセダ出身者を性別で分析すると、男性は71% (5/7) がピャク出身の女性を妻としているが、女性の場合50% (4/8) がピャク出身の男性に婚出し、ロシア人やタタール人など異民族との婚姻が見られる。

備考欄に婚出先 (to) と出身 (from) がわかった場合を掲載したが、同じプール地区内のサンプルグ村およびハニメイ村に該当氏族から配偶者を得る場合があった。このなかで最も興味深いのは、事例1/4/9で、これらはアイワセダ氏族 (A) とピャク氏族 (B) の間での双方交叉イトコ婚であった。図5を見て欲しい。Ego1 (A7) は母親の兄弟の娘 (MBD) と結婚する一方で、Ego1の姉妹 (A4) はEgo1の妻 (B4) の兄弟 (B3) と結ばれている。言い換えれば彼女 (A4) は母親の兄弟の息子 (MBS) と結婚している。これは母方交叉イトコ婚であり、アイワセダとピャク氏族が相互に姉妹を交換する形となっている。Ego2やその姉妹から見ると父方交叉イトコ婚が選択されていることになる。Ego1のアイワセダ氏族はハラムプール村に、そしてEgo2のピャク氏族は、ハラムプール村から350キロ北上したサンプルグ村に暮らしており、両者は年に数回交流があるものの日常的な相互互助は行っていない。A1の世代でピャク氏族Bとの婚姻関係があったのかどうか確認できなかったが、A1の弟二人もそれぞれピャク氏族の娘と結婚している。A2の妻の父親 (ピャク) は、B2・A9・A11が現在暮らすニビヤハで共に宿営集団を形成している。またA3の妻は、プール地区区内でウレンゴイ出身のピャクである。

こうした極めて限定的な資料から過度な一般化はできないが、それでも以下のような推論は可能であろう。つまりアイワセダ氏族とピャク氏族は互いに婚姻すべきと規範で結ばれた関係にあり、現在もその規範は人々の行為に一定の影響をもっていることである。

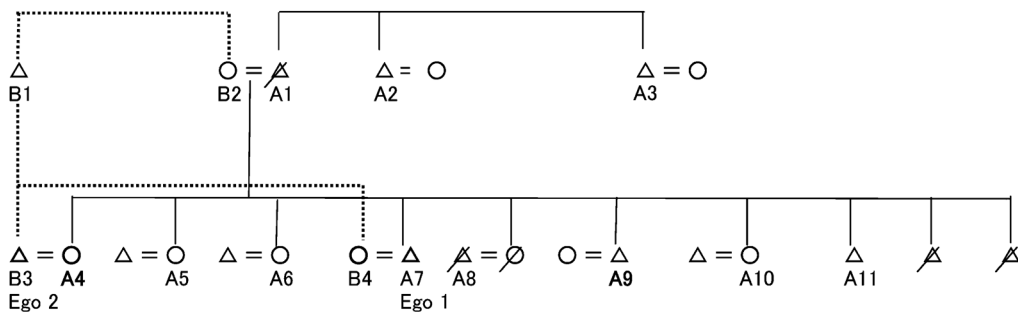


図5 双方交叉イトコ婚の事例

二つの氏族間ではどちらかが妻の送り手と受け手となるわけではなく、双方でいわば限定交換をおこなうような関係にある。

森林ネネツの社会組織において、婚姻関係にあるべきとされる対の氏族がそれぞれ氏族外婚の対象として認識され、それが単なる社会規範というだけでなく世代を超えた形で十分実践されていることが確認できた。そしてこの対となる二つの氏族外婚を支えている中核は双方交叉イトコ婚である。さらにいえば、先に指摘した婚姻規制に関わる分節的な外婚氏族系（図4）を念頭におけば、4つの氏族間には入れ子式に構成された3対の限定交換の関係がみられる可能性があるとは指摘できよう。とはいえ、先に記したように婚姻規則についての聴き取りはアイワセダとピャクの人びとからだけで、アギチェフやヴェッコからは行っていない。その意味では、アイワセダとピャクの人びとにとっての婚姻の選好対象の優先順位を示すものであり、婚姻の可能な範疇を示しているだけの可能性もあることを追記しておく。とはいえ、そもそも異民族集団との婚姻関係を歴史的に許容してきた社会で、限定交換すなわち親族の基本構造（レヴィ＝ストロース）の可能性があるということはいかなる事なのか、次に考えてみたい。

5.3. 親族名称

双方交叉イトコ婚という事実と、氏族外婚という婚姻規制の関係を理解するために、親族名称のデータを加えて分析したいと思う。親族名称の構造という異なる視点から分析することで、双方交叉イトコ婚をふくむ二氏族間の関係の仕組みを考えてみたいのである。

表5と図6を見て欲しい。これはツンドラ・ネネツと森林ネネツ双方の親族名称のリストと、その呼称がどの親族関係者を指すかを示したものである。そこには興味深い特徴が読み取れる。

第一に、ツンドラと森林ネネツ語双方で親族名称の構造に大きな違いはないことである。(イ) オジ・オバをそれぞれ父親・母親よりも年上か年下で類別し、(ロ) 年上なら祖父母と同じカテゴリーに入れる、(ハ) 年下の場合、エゴよりも年上の兄弟姉妹と同じカテゴリーに入れる。(ニ) エゴからみて二世代上つまり祖父母のカテゴリーに含まれる親族は父方・母方を問わず性による区別だけで類別するのに対し、(ホ) エゴからみて一世代上の親族は、父方と母方がそれぞれ別のカテゴリーで示されるという特徴を持つ。斜体で表記したのは、ツンドラ・ネネツのみにみられる関係である。森林ネネツには、エゴから見て同世代以下の関係者をしめす親族名称が欠如しているが、これは資料上の問題で、二つの間は基本的に同じ構造だと考えて問題はない。そのため以下の分析ではより詳細なツンドラ・ネネツの親族名称をつかって分析する。

この表と図から読み取れることは、第一にシベリアの先住民の多く、ネネツを含むサモ

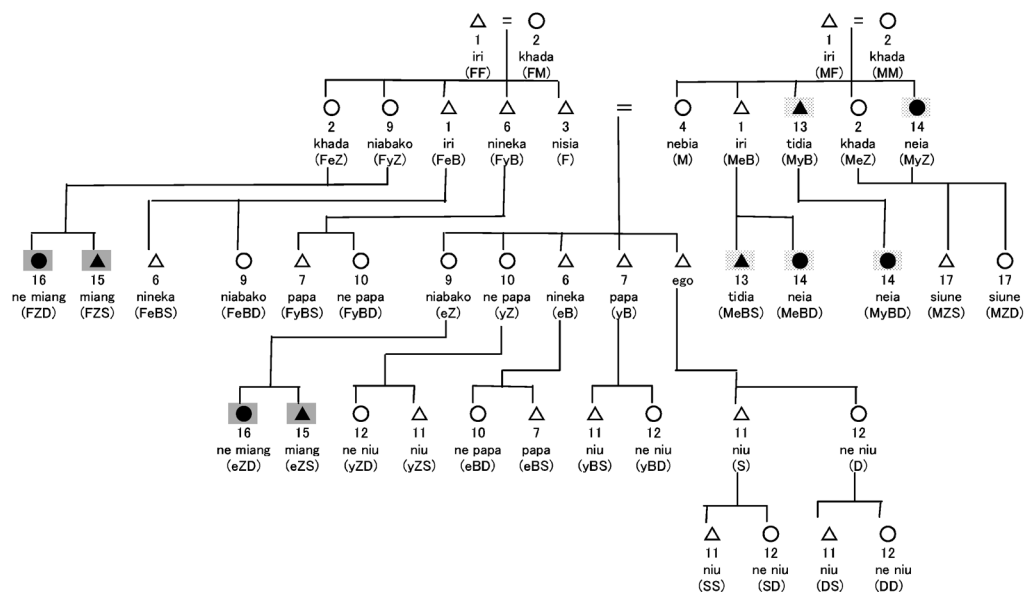


図6 ネネツの親族名称体系（数字は表5を参照）

表5 ネネツの親族名称

Tundra Nenets			Forest Nenets		
#	term	relations	#	term	relations
1	iri	FF, MF, FeB, MeB	1	nil + i	FF, MF, FeB, MeB
2	khada	FM, MM, FeZ, MeZ	2	kata	FM, MM, FeZ, MeZ
3	nisia	F	3	nesha, ochcha	F
4	nebia	M	4	nemia, amma	M
5	nia, khasava	B	5	ydia	B
6	nineka, neka, niaka	eB, FyB, FeBS	6	ydia	eB, FyB
7	papa, pebia	yB, eBS, FyBS	7	kasa, kaika, niuchaydia	yB
8	nia, ne nia	Z	8	nenia	Z
9	niabako	eZ, FyZ, FeBD	9	apa	eZ, FyZ
10	ne papa	yZ, eBD, FyBD	10	nekai'ka, niuchaapa	yZ
11	niu	S, SS, DS, yBS, yZS	11	niu	S
12	ne niu	D, SD, DD, yBD, yZD	12	ne niu	D
13	tidia	MyB, MeBS	13	khodiu''ma	MyB
14	neia	MyZ, MBD	14	nedia	MyZ
15	miang	eZS, FZS			
16	nemiang	eZD, FZD			
17	siune	MZS, MZD			
出典：Khomich 2005			出典：Barmich i Vello 1994 + author's field date		

エード系、フィン・ウゴル系、ツングース系、テュルク系言語の親族名称体系にみられる「年齢世代型」とでも言うべき原理が働いていることである。つまり自己との関係で兄弟姉妹関係が間に介在する傍系親族 (collateral kin) の名称が、同世代の直系親族 (lineal kin) との年齢の上下によって異なるのである。たとえば祖父の弟は父の兄 (伯父) と同じ名称となり、父の弟 (叔父) は自己の兄と同じ名称になるという具合である。その場合親族名称上の世代は(1)祖父・父の兄の世代、(2)父の弟・自己の兄・父の兄の息子の世代、(3)父の弟の息子・自己の弟・兄の息子以下の世代という三つの範疇に分けられるのである [チュレノフ 1984]。図 6 をみればわかるように、ネネツの間には、上記の三つの世代が確認できるのに加えて、(4)弟の息子・息子、息子の息子という自己からみていわば親族名称上二世代下のカテゴリーも存在している。

第二にネネツの親族名称はマードックの類型でいうところのいわゆるオマハ型に該当することである [チュレノフ 1984 : 147]。すなわち(a)父の姉妹の娘 (FZD) と母の兄弟の娘 (MBD) は異なる名称で呼ばれ、また(b)彼らは、姉妹・平行イトコとも区別される。さらに(c)父の姉妹の娘は、呼称からは、姉妹の娘と一緒に分類され、母の兄弟の娘は、母の姉妹と一緒に分類される [マードック 1978 : 266]。

ネネツの親族名称に照らすと以下ようになる。父方平行イトコは、nineka (父の兄の息子 : 6) と papa (父の弟の息子 : 7)、niabako (父の兄の娘 : 9) と ne papa (父の弟の娘 : 10) である。父方交叉イトコは miang (父の姉妹の息子 : 15) と nemiang (父の姉妹の娘 : 16) となる。母方平行イトコは siune (母の姉妹の息子、母の姉妹の娘 : 17)、母方交叉イトコは tidia (母の兄の息子 : 13) (注 17) と neia (母の兄弟の娘 : 14) である。ここからはオマハ型の特徴(a)である nemiang = FZD (16) と neia = MBD (14) とが区別が確認でき、かつ彼ら (nemiang, neia) は姉妹 (niabako, ne papa) や平行イトコ (niabako, ne papa, siune) と類別可能で、(b)条件も適用できる。さらに、16 をみればわかるように、FZD (父の姉妹の娘) は eZD (姉の娘) と同じ呼称となる。一方の 14 にあるように MBD (母の兄弟の娘) は MyZ (母の妹) と同じ範疇になり、(c)も確認できるのである。

オマハ型について、大林 [1984 : 152] は世代や年齢の差の一部が無視されるのは、単系制とリニージの成員とされることが極めて重要視されるからだと指摘している。またマードック [1978 : 287] は、オマハ型が父系制の最も高度に発達した形態で、父系の半族はオマハ型の社会で出現することが期待されると述べている。このマードック理論において、オマハ型の親族名称で半族つまり双分制社会が現れやすいという指摘は重要である。なぜなら、ネネツの親族名称の構造と、双分制的な氏族関係の形成が少なくとも矛盾しないことを裏付けているからである。

図7は双方交叉イトコ婚によって形作られる二つの親族組織の関係モデルに、ネネツの親族名称を割り当てたものである。ネネツの親族名称で重要なのは、エゴ自身およびエゴの両親からみてその兄弟姉妹が年上か年下かである。年上の場合、自己よりも一つ上の世代として類別され、年下の場合自己よりも一つの下世代として類別される構造になっていることは先に指摘した通りである。またエゴからみて上下二世代離れた親族名称は性による区別だけであるのに対し、上下に一世代離れた親族では、兄弟姉妹・平行および交叉イトコが弁別された後、性による区分が現れ、二つの親族組織を跨いで対称的な構造になっていることが一目瞭然である。双方交叉イトコ婚を続ける限り、二つの父系親族組織は平行して維持され続けることになる。ネネツの親族名称は、双方交叉イトコ婚による双分制型の組織モデルと合致する構造をもっているのである。

たしかに、社会構造において双分制的な原理は、二つの氏族間で結婚されればよいだけで、必ずしも双方交叉イトコ婚を婚姻規制として必要としなくても維持されることは確かである [吉岡 1989 : 115]。しかし、本稿の事例である森林ネネツでは前提として双分制

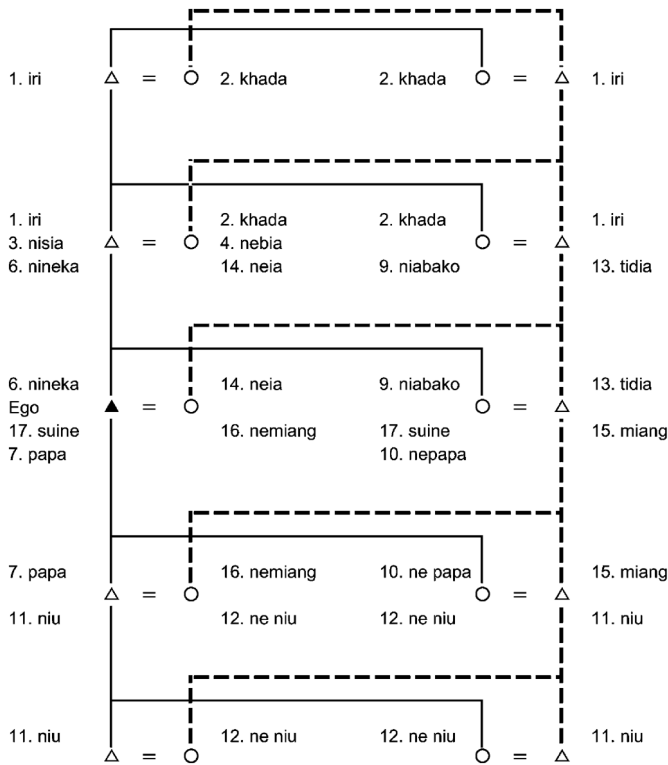


図7 双方交叉イトコ婚モデルとネネツの親族名称

が存在しているわけではない。にも関わらずアイワセダとピャクの間で限定的な縁組みがいわば構造化されうる可能性があることを見てきた。それは規定的な婚姻規則ではなく、選好的な規則による結果によってである。その理由の解明は今後の課題とするが、この点については、以下のバーナードの指摘「クロー=オマハ構造は実際、理念的には複合構造であり、その理由は彼らの結婚の規則が否定に基づく（結婚できない範囲の規定）からである。しかし経験的にみると基本構造となる。なぜなら彼らは配偶者の選択域を狭め、

特定の出自集団に限定するからである」[Barnard 1994 : 806] は示唆的である。今後、彼らの間で双方交叉イトコ婚が規範となっているという仮説をたて分析することは、ネネツの社会構造研究に新たな光を当てることになるのではないだろうか。

6. 定住かつ遊動する生活

6.1. 生活史

これまで森林ネネツの社会空間および宿営集団と親族組織の関わりについて述べてきた。これらをふまえて、調査でえた生活史についての資料に基づき、実際に集落・宿営地で人々がどのような形で暮らしているのか述べていこう。

分析の対象とするデータは、2008年3月8日～18日にかけてハラムプール村の集落・宿営地で聞き取りを行った18人である。男性が13人、女性が5人、宿営地在住者が10人、集落居住者8人である。年齢構成は1930年代生まれが2人、1950年代—3人、1960年代—7人、1970年代—5人、1980年代—1人と、偏りがなく幅広い世代と面談を行った。面談は半構造化方法によるもので、以下の点に留意しながら筆者から質問を行って聞き取りを行うと共に、被質問者が自由に個人史を述べたときにはその流れを尊重した。具体的には、(イ) どこで生まれ今宿営地/集落いずれで暮らしているか、(ロ) 職業は何か、(ハ) 本人にとってツンドラの生活と村・町の関係はどのようなものか、(ニ) 系譜調査を行うとともに、家族や親族の中で誰が遊動生活を送っているのか、というものである。この面談調査を通して、実際に宿営地で暮らす人間がどのような経緯で宿営地での生活を行っているのか、また集落部との関係はどのような形で紡がれているのか、家族の成長史の中で人はどのように宿営地での生活を形作っているのか、より具体的な実像を把握することを目指したのである。

表6は、その面談調査の結果を表にまとめたものである。被質問者の性、生年、居住型（現時点での遊動・定住）、出生地・職歴/現職、(居住・利用する)宿営地、共に居住する人、定住地での自宅、兄弟の数と宿営地生活者の割合、子どもの数と宿営地生活割合、備考欄が記載している。

出生地をみると、約半分がハラムプール村と回答している。それ以外にはタルコサレとあるが、これは同じ行政地区の中心地である。したがって、この村に暮らしている人の多くは外部出身ではなく、地域出身者が集落・森林領域双方で生活を営んでいることがわかる。

興味深いのは、遊動生活をしている人であっても80%にあたる人は定住地に自宅をもっていることである。重要なのは、ハラムプール村の領域で遊動生活をする人々のなかでタルコサレ市に自宅を持つ人が意外と多いことである。これは集落の規模を考慮すると

表6 ハラムプール村内の森林ネッツの個人史一覧

ID	性	生年	居住型	出生地	職歴/現職	宿营地	共に居住する人	定住地での自宅	兄弟姉妹の 数と宿营地 生活者	%	子どもの 数と宿营地 生活者	%	その他
1	F	1934	遊	不明	掃除婦・電報係・ 製材所/年金	ニビヤハ	H, S	タルコサレ	—	n.a.	1/2	50%	
2	M	1936	遊	不明	自動車工など/年金	ニビヤハ	W, S	タルコサレ	0	n.a.	1/2	50%	
3	F	1956	遊	タルコサレ	毛皮衣類製作/なし	ニビヤハ	H, S, D, SS	ハラムプル	0/1	0%	2/4	50%	子どもは村の自宅 居住
4	M	1958	遊	ハラムプル宿营地	漁師・ポイラー係/ 漁師	ニビヤハ	W, S, D, SS	ハラムプル	0/1	0%	2/4	50%	子ども達は村の自宅 から学校へ通う
5	M	1961	遊	ハラムプル村	—/漁師	ニビヤハ	F, M	タルコサレ	0/1	0%	—	n.a.	
6	F	1966	遊	ターゾフスキー 地区出身	—	チュバシカ	H, 2S, 3D	—	—	n.a.	—	n.a.	
7	M	1968	遊	ハラムプル村	—/漁師	不明	W	タルコサレ	—	n.a.	0/6	0%	子ども6人はタル コサレ居住
8	M	1972	遊	ツンドラ	ポイラー係/漁師	チュバシカ	W, 5S	タルコサレ	1/3	33%	5/6	83%	息子一人はタルコ サレ居住
9	M	1977	遊	ハラムプル宿营地	—/漁師	ニビヤハ	M, W, 2S, D, yB, eZS	自宅なし	2/6	33%	3/3	100%	ハラムプール村に 妻の美家
10	M	1984	遊	不明	—/漁師	ハド・テ・ プル	M, yZ, yB	タルコサレ	3/3	100%	—	n.a.	兄弟夫婦が同じ宿 营地
11	M	1955	村	ハラムプル宿营地	漁師・牧夫/年金	(ニビヤハ)	W, S, 3D, DS	ハラムプル	1/1	100%	0/5	0%	夏期のみ夏营地で 漁に従事
12	M	1962	村	ハラムプサラ村	漁師・牧夫(メド ベージェカ宿营地) /漁師	(チュバシ カ)	W	ハラムプル	2/2	100%	3/5	60%	3人の娘は嫁出、 一人は寄宿学校
13	F	1964	村	タルコサレ近郊 ツンドラ	寄宿学校養母・学 校教師/「文化の家」 所長	なし	H, 3S	ハラムプル	0/2	0%	0/3	0%	大学卒
14	M	1967	村	タルコサレ	—/漁師	不明	W, 6C	—	3/6	50%	0/6	0%	
15	M	1967	村	ハラムプル村	漁業工場職員/「文 化の家」歌手	なし	—	ハラムプル	0/1	0%	—	n.a.	両親はハドテ宿 营地で働く；妹はベ ラルシ人と結婚 しハラムプサラに 在住
16	F	1971	村	ハラムプル村	—	(サン プル グ村管轄内 ツンドラ)	H, 3S, 3D	サンブルグ	2/6	33%	6/6	100%	実家に帰省中(サ ンプルグ村居住)
17	M	1974	村	タルコサレ	—/漁師	(ハラム プル)	W, S	ハラムプル	2/4	50%	1/3	33%	二人の子どもはタ ルコサレで学校
18	M	1978	村	ハラムプル村	—/漁師・猟師	(ポイント)	W, 2S, D	ハラムプル	1/4	25%	0/3	0%	夏期のみ夏营地で 漁に従事

理解できることであるが、タルコサレ市というハラムプール村とは異なる地域に自宅を持って元々のハラムプール村の領域を使っていることを示している（注18）。なお、#9は自宅がなかったが、妻の実家がハラムプール村にあり、そこを利用している。こうしてみると、遊動生活をしていても定住地との密接な関係があることが確認できる。また遊動生活者の居住構成をみると核家族あるいは拡大家族で、天幕には家族と共に暮らしていることがわかる。この点で彼らの生活がソ連時代に確立された成人男子を中心とする生産遊動ではない。ただ注意したいのは、夫婦が中心となっており、子どもは必ずしも同居しているとは限らないことである。子どもは学校や職業によっては定住地に暮らしており、学校の休みや休暇を利用してやってくる。その意味では生業のための宿営地という側面ももっている。

一方、集落生活者8名の内2名のみが宿営地とは関係ない生活送っている。二人は「文化の家」職員（#13と#15）である。彼らの双方とも両親はツンドラでかつて働いた経験をもっていたが、現在は自分たちが定期的に滞在する宿営地はもっていない。またその兄弟姉妹や子供いずれも宿営地とは直接関わらない職業で暮らしている。とはいえ彼らの親族がこの村に暮らしていることを考えると、宿営地と完全に無縁な生活であるとは考えられない。つまり定住地における固定家屋と宿営地の天幕の生活は何らかの形でつながっているのである。

6.2. 漁業と土地利用

職歴・現職をみると、遊動生活者か定住生活者かを問わず男性の多くは過去においてあるいは現職として漁師をやっている人が多いことがわかる。注意したいのは、遊動生活者のなかでも、ボイラー係や自動車工などの職業つまり集落での生活を送った経験がある人がいることである。#2の男性は運搬労働者・自動車工などをへて年金生活に入り、基本的には集落での生活を基盤にして暮らしてきたが、所有するトナカイの面倒を見る必要が出たことから1998年に宿営地での生活に戻ったという。

興味深いのは定住生活者でも、現職・履歴含めて男性の多くが漁師と答えていることである。この理由は宿営地における夏営地での生活形態と関係がある。前述したように夏営地は冬営地よりも居住人数が多く合同で河川漁業に従事することを述べた。集落に定住する人々であっても夏になると、それぞれ自分の関係する宿営地に出かけていき、そこで天幕での生活を送りながら一定期間暮らすのである。例えば#11の男性は現在年金生活者で集落に暮らしているが、夏になると宿営地に移動し漁を手伝いながら過ごす。この場所は、彼の弟の家族とオイ（eBS）の家族、さらに彼自身の妻の両親と子供が宿営集団を形成している。

漁労そしてトナカイ飼育という生業と遊動生活の結びつきの実態について#12の男性の事例に即しながら見ていこう。

【事例1：#12】1962年生の男性（ピャク氏族パンヒ）、定住生活者。ハラムプール集落で生まれ、教育はハラムプールとタルコサレの寄宿学校で受けた。その頃、両親はベルフネ・プール国営農場の労働者で、チュバシカ宿営地で漁民兼猟師として働いていた。1979年で自分も同じ国営農場で働き始める。その後1996年まで国営農場だったが、この年に生産組合に変わる。この間漁民としてチュバシカで暮らしながら働く。1997年から1年間トナカイ牧夫として働いた。組合にはトナカイが十分いなかったため、ヤマル地区から買い付けた。妻は天幕世話係（chumrabotnitsa）として働いた。1年後それらのトナカイは牧夫たちに配布してこの組合のトナカイ飼育は終わった。牧夫として働いていたときには、メドベーシカ宿営地に居た。1998年にチュバシカにもどって猟師にもどり、現在に至る。2005年に現在の集落での定住家屋をもらった。今は、基本的に集落で暮らしているが、夏には息子夫婦とともにチュバシカで漁を行っている。妻は1959年生でアイワセダ氏族ジャンヒュータの出身で子供は五人いる。

この事例は、ソ連時代のシベリア先住民の典型を示している。寄宿学校での生活そして自分の生まれた地域の国営農場での雇用と労働によって人生が特徴づけられているからである。そして遊動生活・定住生活いずれにあっても、トナカイ飼育とくに漁業がその中心にあることがわかる。

図8を見て欲しい。これはこの事例のエゴ（#12）であるピャク氏族の男性の家族のニシ利用を示したものである。図のなかでのPはピャクを、Aはアイワセダを示している。エゴ（黒の三角）の父、姉、娘2人の配偶者はすべてアイワセダ氏族出身であり、ここでも婚姻規制が遵守されていることがわかる。興味深いのは、ニシの利用もまた氏族毎に分かれていることだ。すなわちエゴやその両親および婚出した娘をのぞく子供はチュバシカ宿営地を使っており、婚出した姉と自己の次女が配偶者とともに暮らすのはメドベーシカ宿営地なのである。残念ながら、ここで交叉イトコ婚が実施されているのかまでは確認しなかった。ただ、これを見る限り、その可能性は十分あることを示している。漁業という生業とそしてそれを行う上での土地利用における父系氏族と婚姻規制が実際に機能していることを確認できる。

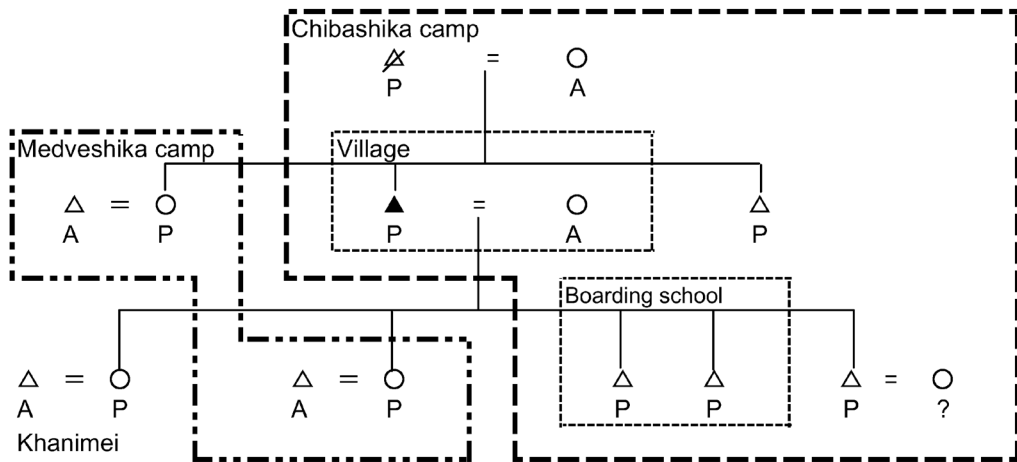


図8 宿営地と家族の関係

6.3. 親族関係者の遊動性

表のなかにはエゴの兄弟姉妹や子供が遊動生活を行っているかどうかの割合を示してある。遊動生活あるいは定住生活を送っている者の親族が同じように遊動生活なのか定住生活なのかを示すことができるからである。言い換えれば宿営地と集落での生活の間のネットワークしめす一定の指標となる。

兄弟姉妹の遊動生活率については、全体では38%の兄弟姉妹が遊動生活を送っていることになる。つまりエゴからみると三人に一人以上の兄弟姉妹は遊動生活を送っていることになる。興味深いのは、遊動生活をしているエゴの兄弟姉妹の遊動生活率は28%、定住生活をしているエゴの兄弟姉妹の遊動率は45%である。着目したいのは数字そのものというよりも定住生活者の兄弟姉妹が遊動している割合が相対的に多かった点である。単純に言えば、定住生活者は、より多くの遊動生活を送る兄弟姉妹がいるということであり、ここからも集落と宿営地の密接な結びつきを読み取ることができる。

子供については、全体で41%が遊動生活をおくっている。ここでいう子供は成人しているか否かを不問にしており、とくに調査時点において寄宿学校で生活する子供は定住生活として換算した。その点を考慮しても、遊動生活者が再生産されていることを示しているといえよう。なお、遊動生活者の子供の遊動生活率は55%で、定住者の子供の遊動生活率は28%であった。ある意味でこの数字の割合は順当であろう。興味深いのは定住生活をしていても子供が遊動生活者になっていくという点がみられることである。これは、前節で述べたように、個人の生活史のなかで定住と遊動が明確に区分されていないこの地域の状況を考慮すると理解できるだろう。

こうした全般的状況をふまえて、30代の若い人物の事例#18を見てみよう。

【事例2：#18】1978年生、アイワセダ氏族（ジャンヒュータ）の男性で、定住生活者。ハラムプール集落で生まれた。彼は、行政登録上はロシア風の名前をもつが、同時にアカン Akan というネッツ名をもっている。当時両親はポイント宿営地で暮らしていた。タルコサレの寄宿学校に通い、休みの時にはポイントに戻った。妻は1977年生まれでピャク氏族のピャク出身だが、市民婚（grazhdanskii brak）のため、登録していないので別姓のままである。1998年3月の〈トナカイ牧夫の祝日〉にあわせて結婚式を行った。彼女とはタルコサレの寄宿舎学校で知り合いになったので、婚資はない。子供は3人おり、みな幼く妻子とともに一緒に集落で暮らす。兵役後、1998年から地区内の農業企業で漁師・猟師として働き始め、2000年以降はハラムプールの先住民生業組合に移り、同じ仕事をした。2003年に今すんでいる家屋をもらった。2007年から組合の保管・受け入れ主任となり、集落での仕事を中心となった。とはいえ、6月～11月の漁期には、ポイント宿営地でも仕事をする。それ以外は村で暮らす。彼の姉（33才—2008年）はピャクの男性と結婚し、同じ地区内のハニメイ村のリキプールネというツンドラで遊動生活を送っている。もう一人の姉（31才）はタタール人の男性と結婚しハラムプール集落で暮らしている。妹（28才）は集落内の寄宿学校のネッツ語の教師で独身、寄宿学校内で暮らす。一番下の妹（16才）は生徒として寄宿学校で暮らしている。

ここで出てくるネッツ名とは、行政に登録されているロシア風の名前とは別のものである。氏族名はそれほど種類がないし、またロシア風の名前もある程度決まったものが使われるので、会話のなかで誰を示しているかははっきりさせる場合、このネッツ名を用いるということだった。また婚資のやりとりについて彼のように否定的な回答が多かった。唯一あったのは、両親たちの間で結婚が取り決められたときには、妻の実家にトナカイを2-3頭送るといった答えだった。自分で相手を見つけたときにはやりとりはないという。定められた氏族間での婚姻規制は、婚資と直接かかわっていないようである。

なお、この男性の兄弟姉妹は二人の姉と二人の妹である。長女の姉が別村に婚出し、家族で遊動生活を送っている以外は、皆集落に拠点を置いた生活を送っている。また子供はみな十歳以下であり、遊動生活はしていない。計算上、彼の兄弟姉妹の遊動者割合は25%であり、子供の遊動率は0%である。さらに彼自身も、現在主任として生産組合で管理職的な立場にある。しかしながら、それでも夏の六ヶ月間は、かつて両親とともにすごしたポイント宿営地に戻りそこで漁を行う生活を送っている。父方の親族が暮らしているか

らである。このような定住者でもあっても、宿営地での生業を含む生活パターンは切れていない。なお、彼の妻そして、彼の姉の婚出先もピャク氏族であり、アイワセダとピャクの婚姻規制が守られている。

6.4. 宿営地での生活

以上において定住生活者の立場から遊動生活とつながりを見てきた。ここでは、宿営地で暮らす事例を見てみよう。

【事例3：#8】ピャク氏族パンヒの男性で、遊動生活者、1972年にツンドラで生まれる。タルコサレで学校生活を終えた後、チュバシカ宿営地で漁師として暮らしている。両親はすでに死去しているが、彼らもチュバシカにいた。学校を出た後は、ベルフネ・プール国営農場で働いたが、「何もくれなかった」ため、タルコサレ市でボイラー係として働いた。現金をためて1991年にはスノーモービルを買った。その後ハラムプールの生産組合で漁師として働く。妻はアイワセダ氏族出身の1973年生で、二人の間には6人の子供がいる。一人の子供はタルコサレ市に婚出した姉の家で暮らし学校に通っているが、それ以外の子供はチュバシカ宿営地で暮らす。国営農場の時には交通手段としてはトナカイを使っていた。現在トナカイは5頭ほど持っている。2頭の成獣雌と3頭の種雄である。家畜はチュバシカ宿営地の関係者の合計40頭ほどを一つの群れとして管理している。耳印は家族ごとにある。自分のは家族から受け継いだ。彼の天幕のとなりで暮らすのは、その兄の家族である。彼らはチュバシカで暮らしてきており、隣人もふくめて宿営地にいるのはすべて親戚である。学校を終えて、タルコサレ市に家があっても自分がここに帰ってくるのは当然だった。どこのニシを使うかについて役場は関与できない。すべて自分たちで決めてきた。

この事例の男性は兄一人と姉二人であるが、婚出した姉二人は遊動生活を送っていないが、兄夫婦そしてそれ以外のピャク氏族の親戚とともに、宿営集団を形成している。彼はタルコサレ市に自宅をもっているが、遊動生活を営んでいる。現金がまとまって必要な場合は、町で職業につくという経験をもっているが、それでもやはり遊動生活に戻ってくる。そしてそのことを当然視しているのである。

興味深かったのは、宿営集団＝宿営地の利用にあたっては、彼ら自身の意志決定が重要であり、行政が介入してこないという主張である。この点はソ連時代の国営農場制度における農場による生産区画の土地管理という問題とどのような折り合いがあったのか現時点ではわからないが、宿営地の管理が森林ネッツの人々自身によって行われていたことは間

違いない。注意したいのは、少なくともアイワセダとピャクとの相互婚姻関係は、世代を超えて、プール地区内の村の領域を超えて実践され続けてきており、そのなかで宿营地ニシの管理は、原則として父系氏族を単位に行われてきたということである。

こうしてきて導けるのは、少なくともハラムプール村の領域内で暮らす森林ネネツは、ソ連時代の定住化が行われたにもかかわらず、宿营地での遊動的な生業活動を組み込み、かつそれを行う社会組織は、外婚単位となる父系氏族を基盤とするものであったという点である。それは、ソ連の他の地域で見られた定住と生産遊牧という遊動性と国営農場と共産党の意志決定を中心とする社会編成（およびそのポスト社会主義的状況）〔高倉2000、高倉・佐々木2008〕とはあきらかに異なる原理である。とはいうものの、彼らの社会は生活様式としての遊牧/遊動だったのだろうか。筆者の考えでは否である。定住化政策に伴う学校制度（そして今回ほとんど言及しなかったが医療制度）は明らかに彼らの社会に取り込まれている。本章でもみてきたように、遊動生活者もほとんどは定住地での恒常的家屋をもっているのである。この状況をどのように考えたらいいのだろうか、最後に考察してみたい。

7. 結論

「新鮮な空気が好きだし、夏を待つのもいい。チュム（天幕）の生活は大変だが、そこが好きだ…バレンチン（息子）が小さい頃、モーターボートが壊れて、8月だが冷たい雨がふって森のなかに泊まったことがあった。パンもなく、近くに猟師がいたので、子供を使いに来て食料をわけてもらった。次の日は晴れて移動できた。こういう体験が私は好きだ」

森林ネネツの人々はなぜ遊動生活を維持しているのだろうか。シベリアの他の地域での現地調査を行ってきた筆者が、ハラムプール村において最も強く抱いた疑問である。ソ連政府による暴力を伴う強烈的な集団化政策とこれに続く定住化政策、それを後押しする社会主義イデオロギー教育があったにも拘わらず、ここで調査をしている限り、他の地域で垣間見ることができる社会主義時代の残存が人々の生活に入り込んでいるようには思われなかった。なぜ人々はそのような生活を実践しているのか、その社会の仕組みはいかなるものか——これがネネツ調査で得た課題である。

冒頭で紹介した言説は、表6の#3の女性に対して、なぜ遊動生活を続けるのかと聞いたときに得られた答えである。幾人にも似たような質問をくり返したが、このような質問はあまり適切なものではなかったようである。人々は宿营地で生活することをあまりに当

然視しているからである。多くの回答は、上記のように自然が美しいとか、恒常的家屋(kvartira)は好まない、誰にも命令されずに生活できる、さらに家畜トナカイの面倒をみるため、といったものがくり返されたからである。たしかに集落では行政機関・経済組織のなかでの垂直的な社会関係が存在する。宿営地での生活はそれと直接向き合わずにすみ、本稿では描写できなかったが、漁業による食料確保は生活を維持するという観点においてはそれほどきつい労働ではない。その作業の一部に参加しながら感じたのは、宿営地での生活とは、確かにやり甲斐もあり楽しみもあるという点では一定の魅力があることだった。

結論からいえば、分析的な意味ではこのような言説は、人々が遊動生活を維持する理由を十分説明することにはならない。そこで本稿が採用したのは、そうした彼らの生活を支えている社会の仕組みに着目することであった。遊動生活を支える社会組織の編成と土地利用を分析することで、いかなる形で森林ネッツは遊動生活を維持しているのかを検討してきたのである。明らかになったのは、彼らの社会において父系氏族を保有・利用の単位とするニシという宿営集団＝生産領域が現存し、同時にこの父系氏族は対となる別の氏族と相互に外婚を行う形で再生産されるべきという社会規範が機能していることであった。現地調査期間が十分でなかったため、資料不足で十分吟味できなかった領域も多々残っており、その意味で、本稿は中間報告的な性質であることを否定しない。

しかしながら、それでもはっきりと主張できるのは、森林ネッツがソ連時代の集団化・定住化政策・社会主義教育を経た後において、定住地での恒常的家屋を保持しながら、その一方で河川漁業を中心とする遊動生活を彼ら自身の社会原理に即して再生産させているということだ。興味深いのは、この遊動性がトナカイ牧畜に直接由来するというよりも、河川漁業を基盤としているという点である。従来、今日におけるシベリア先住民の遊動性は専らトナカイ牧畜と結びつけられてきたからである [吉田 2003b : 105]。漁業の生態的・技術的特質と遊動生活の関係について本稿では言及できなかったが、夏営地での多人数による共同での漁業がある一方で、冬営地では少人数の家族基盤の漁業が個々に実践されるあり方は重要である。これはいわゆる社会形態の季節に基づく変化であるが、一年を通して恒常的に共同作業を必要としないという生業の特質は、彼らの遊動生活における個々の自立性を支えている要因にもなりうるからである。最も重要なのは、そうした生業を営む社会空間(ニシ)が、父系氏族と婚姻規制を核として再編される社会組織と密接に結びついていることを本稿が明らかにしたことである。

もう一点重要なのは、森林ネッツの人々の遊動性は、「生活様式としての遊動」概念では捉えきれない点である。いくら人々が宿営地での生活を好もうと、定住地もまた彼らの生活を支える重要な基盤だからである。寄宿学校での生活はいうまでもなく、個人のライ

フサイクルに恒常的家屋を含めた定住地の存在ははっきりと組み込まれている。にもかかわらず、人々は遊動生活をも実践するのである。このあり方は明らかに国家が意図した定住化からは逸脱している。筆者が着目したいのは、この点である。定住化政策を実施した側の非遊動民には想定されていない社会空間が、遊動民によって開発され、それが彼ら在来の社会組織原理が絡み合う形で展開している—この点が本稿で主張したかったことである。そこでは定住と遊動は対立する概念となっていない。人々は自分の生活史のなかでいずれかを選択するが、選択したからといってもう一方を否定するわけではないからである。このような生活様式を理解するため、「遊動定住連続体 nomadic-sedentary continuum」という概念を提起したい。

それは国家による遊動民への定住化政策を前提とし、定住のための集落や施設が存在している状況のなかで、遊動性も維持されるというあり方である。この概念において定住と遊動は対立概念ではない。従来の研究のなかには逃避（忌避）・消極的対応・積極的対応といった段階を設け、定住化政策に対する先住民の対応を分析するものもあったが〔吉田 2003b : 103〕、そこでの両概念は対立的に用いられてきた。遊動定住連続体というのは、二つの極を想定し、一方に定住そしてもう一方に遊動を置くがその間のいずれかの相において生活様式が形成されるというあり方である。ジェンダーや個人のライフサイクルや職業選択など様々な条件に応じてその都度毎に相は変わるものの、定住と遊動の往来は当事者にとって矛盾することなく、選択・実践されるのである。

こうした遊動定住連続体は、森林ネッツだけにみられるものではないという見通しを筆者はもっている。例えば、社会主義体制崩壊後のモンゴル国においては「郊外化現象」が生じている。これは旧体制期の国营農場システムから自給的牧畜への展開をへて、さらに近年、都市機能との連関を強化するために都市近郊に牧民が移住するという現象である。そこでは都市生活と遊牧生活は二者択一になっていない〔尾崎 2008〕。さらに、政治体制や地理的にも離れたオーストラリア・アボリジニ社会における 1980 年以降のアウト・ステーション運動〔窪田 2005〕にも類似した側面があるのではないかと考える。この遊動民もまた、国家の定住化政策を前提として、定住地をもちながらも、遊動生活をするための生活様式を確立したからだ。もちろんモンゴル社会とアボリジニ社会に遊動定住連続体概念が適用できるかどうか現時点で判断を下そうとするものではない。しかしながら、遊動民に対する定住化が、非遊動民の空間利用と生活様式とは明らかに異なるパターンを生み出しており、その実態を理論的に比較検討するための分析概念が必要だといいたいのである。遊動定住連続体概念はその候補たりうることを主張しておこう。

本稿が明らかにしたのは、国家の統治下に入った遊動民は決して不可逆的に定住化するわけではないということである。森林ネッツの場合における宿営集団＝生産領域ニシとこ

れを支える父系親族と婚姻規制の機能にみられるように、在来の社会組織と土地利用が条件となり、住民は定住と遊動を織り合わせながらの生活様式を編み出したのだ。本稿の民族誌的事実から得られた理論は、いくつかの条件がそろふことで、定住化に対して、国家の政策決定者が意図していたあり方とは異なり、遊動民自身の在来の社会組織と生業に応じた適応が新たに生じうるということである。こうした現象を概念化するのが「遊動定住連続体」なのであった。

注

注1：なお本稿で扱うデータは、2008年3月3日から20日にかけてロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区内(サレハルド市・タルコサレ町・ハラムプール村および複数の宿营地)で行った現地調査で得られた統計・行政資料・フィールド資料に基づく。調査言語はロシア語である。当初、再調査を行いさらなる民族誌資料の収集を予定していたが、諸々の事情で断念することになった。

注2：ちなみに1926-27年には1126人、1962年には約1500人と登録されている [Khomich 1971 : 200]。

注3：婚姻以外で二つの胞族がどのような関係にあったのかはわかっていない。例えばオーストラリア・アボリジニのように儀礼や自然の分類を含む社会の様々な領域が胞族(半族)毎に二分され、かつその胞族(半族)に名称があるといった双分制と比べると、ツンドラ・ネネツの胞族はそれ自体名前があるわけではなく、婚姻規制の機能をもつだけである。この点で「胞族」概念が適切であるかどうかは検討を要するが、研究史という文脈でこの用語を用いる。

注4：アイワセダの婚姻対象はツンドラ・ネネツの胞族の第二集団 (Vanuita)、一方ピャクの婚姻対象はツンドラ・ネネツの胞族の第一集団 (Khariuchi) であるという指摘もある [Zen'ko 2007 : 27]。

注5：なお19世紀末から20世紀初頭にはこうした氏族を基盤とするンゲシに変わって非親族的でトナカイ頭数を多く保有する者によって形成された宿営集団パルマ parma が主流となったという報告もある [佐々木 1984a : 209]。

注6：ネネツ語における側面解放破裂音の表記は「l」と表記する。

注7：なお、研究者の中にはネネツ語に家族という概念はなくロシア語からの借用だという見解もある [Volzhanina 2009 : 123]。

注8：北方先住少数民族の概念はロシアの民族政策上の概念で、シベリアなどロシア人の認識の上での辺境 = 北方の先住民で人口5万人以下の民族を範疇化したものである [高倉 2009]。

注9：統計資料「Chislennost' postoiannogo naseleniia sel'skikh naseleennykh punktov Iamalo-Nenetskogo avtonomnogo okruga na 1 ianvaria 2008 goda」(ヤマル・ネネツ自治管区サレハルド市統計局 (Iamalostat)、2008年3月5日)。

注10：統計資料「Svedeniia o chislennosti kochuiushchego naseleniia v raionakh prozhivaniia malochislennykh narodov Severa na 1 ianbaria 2007 goda po Iamalo-Nenet-

skomu avtonomnomu okrugu」(ヤマル・ネネツ自治管区サレハルド市統計局(Iamalostat)、2008年3月5日)。

注11: 統計資料「Chislennosti KMNS po Purovskomy raionu na 01.01.2008」(ヤマル・ネネツ自治管区サレハルド市やプール地区タルコサレの北方民族管理局、2008年3月21日)

注12: ハラムプール村の歴史については、プール地区創設75周年記念に発行された写真アルバム『U poliarnogo kruga: 75 let purovskii raion』(2005発行、村役場所蔵)を参考にした。

注13: これはツンドラ、森林ネネツ双方に共通している。筆者が調査した東シベリアのエヴェン人の場合、宿営地での天幕は直線に配置されることはなく、円陣を組むような形で配置され、真ん中の空間は家畜の捕獲場所あるいは騎乗や搾乳個体の使役個体が係留される場所であった。

注14: あるインフォーマントからの聞き取りでは、冬の期間、一つの宿営地には多くて30人。少ない場合5-6人ぐらいが暮らしているという情報もあった。

注15: 現在、氏族は姓として認識されており、女性は結婚に際して夫の姓に変える場合が多い。

注16: ちなみにアイワセダ氏族で下位区分もアイワセダの50代の男性は、自分の息子について時期が来たら彼の兄(eB)の母の親族であるピャク氏族の下位区分ンガイヴァヒの人に適当な人がいないかどうか聞いてみるという発言した。後述するようが、アイワセダとピャクは所謂双方交叉イトコ婚を規範とし、この男性もまたそれを実践している。この点からするとエゴであるアイワセダの男性が、母の親族としてピャクの下位区分を指摘するのは論理的におかしくはない。また交叉イトコ婚の対象を探すときに優先的な下位区分があるという可能性も論理的には導ける。この検討については、今後の課題としたい。

注17: 論理的には母の弟の息子(MyBS)の呼称もあるはずだが、資料上確認できなかった。

注18: 注10の統計資料によれば、タルコサレ市には北方少数先住民族は1409人おり、このうち330人が遊牧世帯人口と登録されている。彼らの一部はハラムプール村の宿営地で暮らしている。

【付記】本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金19401040「極北先住民の生存・共生システムとしてのトナカイ牧畜文化の研究」(研究代表者・吉田睦千葉大学教授)による成果の一部である。現地調査は、代表者の吉田氏およびロシア科学アカデミー人類学民族学研究所のM. A. ゼニコ氏との三人で行った。筆者はネネツ調査がはじめてだったこともあり、同行した二人にはお世話になった。特に現地調査に誘ってくれた吉田氏には深く感謝したい。西シベリアのフィールドは筆者に新たなる人類学の可能性を与えてくれた。また親族名称の分析に際しては同僚の瀬川昌久氏から示唆を受けた。記して感謝する。

参考文献

井上紘一 1998

「共存のモデルを求めて」井上紘一編『民族の共存を求めて(3)』(スラブ・ユーラシアの変動・領域研究報告輯 52) 3-15 頁、札幌：北海道大学スラブ研究センター。

大林太良 1984

「解説・シベリアにおける親族称呼体系」『えとのす』24：151-153 (東京：新日本教育図書)。

尾崎孝宏 2008

「モンゴル牧民社会における郊外化現象——ポスト『ポスト社会主義』的牧民の出現に関する試論」高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』481-500 頁、大阪：国立民族学博物館。

窪田幸子 2005

『アボリジニ社会のジェンダー人類学——先住民・女性・社会変化』京都：世界思想社。

佐々木史郎 1984a

「ネネツ族の社会——トナカイ飼養の発展とその影響」『民族学研究』49/3：203-232。

佐々木史郎 1984b

「シベリアのトナカイ遊牧——西シベリア、ネネツ族の事例とその経済的意義の考察」『季刊人類学』15-3：114-182。

高倉浩樹 2000

『社会主義の民族誌——シベリア・トナカイ飼育民の風景』東京：東京都立大学出版会。

高倉浩樹 2009

「シベリアの狩猟・牧畜をめぐる歴史と現代ロシア」『朝倉世界地理講座 2・東北アジア』301-313 頁、東京：朝倉書店。

高倉浩樹・佐々木史郎編 2008

『ポスト社会主義人類学の射程』大阪：国立民族学博物館。

チュレノフ、M. 1984

「シベリアにおける親族称呼体系」(佐々木史郎訳)『えとのす』24：146-150 (東京：新日本教育図書)。

マードック、G. P. 1978 (1949)

『社会構造——核家族の社会人類学』(内藤莞爾監訳) 東京：新泉社。

吉岡政徳 1989

「縁組と親族」合田壽編『現代社会人類学』97-128 頁、東京：弘文堂。

吉田睦 2003a

『トナカイ牧畜民の食の文化・社会誌——西シベリア・ツンドラ・ネネツの生業と食の比較文化』東京：彩流社。

吉田睦 2003b

- 「ロシア異民族（先住民）統治史における『非定住民』——概要と西シベリアの状況」岡洋樹・高倉浩樹・上野稔弘編『東北アジアにおける民族と政治』89-107頁、仙台：東北大学東北アジア研究センター。
- 吉田睦 2009
「森林ネネツ（ロシア・西シベリア）のトナカイ牧畜——先行研究概説」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』11号：1-20.
- Barnard, A. 1994
Rules and prohibitions: the form and content of human kinship. In T. Ingold, ed. *Companion encyclopedia of anthropology*, pp. 783-812. New York and London: Routledge.
- Barmich, M. and A. Vello 1994
Slovar' nenetsko-russkii i russko-nenetskii: Lesnoi dialect. Sankt-Petersburg: Otdelenie izdatel'stvo <Prosveshchenie>.
- Dolgikh, B.O. 1970
Ocherki po etnicheskoi istorii nentsev i entsev. Moscow: Nauka.
- Gemuev, I. N. et al ed. 2005
Narody zapadnoi sibiri: khanty, mansi, sel'kupy, nentsy, entsy, nganasany, kety. Moscow: Nauka.
- Khazanov, A. M. 1983.
Nomads and the outside world (trans. By J. Crookenden). Cambridge: Cambridge University Press.
- Khomich 1995 (1966)
Nentsy: Ocherki traditsionnoi kul'tury. Sankt-Peterburg: Russkii Dvor.
- Khomich, L. 1971
Nekotorye osobennosti khoziaistva i kul'tury lesnykh nentsev. In A. Reshetov ed. *Ohotniki, sobirатели, ryboloby*, pp. 199-214. Leningrad: Nauka.
- Krupnik, I. 1993
Arctic Adaptations: native whalers and reindeer herders of Northern Eurasia. Hanover: University Press of New England.
- Levin, M.G. and B. A. Vasil'ev 1964
The Evens. In M. G. Levin and L. P. Potapov eds. *The peoples of Siberia*, pp. 670-684. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Prokof'yeva, E. D. 1964
The Nentsy. In M. G. Levin and L. P. Potapov eds. *The peoples of Siberia*, pp. 571-581. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Stammler, F. 2005.
Reindeer nomads meet the market: culture, property and globalization at the 'end of the land'. Munster: Lit.
- Vasil'ev, V. N. 1979
Problemy formirovaniia severo-samodiiskikh narodnostei. Moscow: Nauka.

- Verbov, G. 1936
Lesnye nentsy. *Sovetskaia etnografiia* 1936 (2): 57–70.
- Verbov, G. 1939
Perezhitki rodovogo stroia u nentsev. *Sovetskaia etnografiia* 1939 (2): 43–66.
- Vitebsky, P. 1990
Centralized decentralization: the ethnography of remote reindeer herders under Perestroika. *Cashiers du Monde russe et soviétique*, XXXI (2–3): 345–356.
- Volzhanina, E. A. 2009
Demography of the Siberian Nenets in the first third of the 20th century. *Archaeology, ethnology and anthropology* 37/1: 118–128.
- Yoshida, A. 2009.
Private reindeer herding among the Tundra Nenets in West Siberia, Russia: practice of “ethnic” herding. Paper presented in the international conference “Social significance of animals in nomadic pastoral societies of the Arctic, Asia and Africa: a Japanese-Finish seminar” May 15–18, 2009, at CNEAS, Tohoku University, Sendai, Japan.
- Zen’ko, M. A. 2007
Sibirskie lesnye nentsy: istoriko-etnograficheskie ocherki. Ekaterinburg: Basko.